一統

（明治三十年三月廿四日第三種郵便物認可　毎月一回十五日
全三十七年六月十五日發行統一第百十二號　十五日）

第百十二號要目

○勸信要義（承前）……本多日生
▲釋尊研究論……記者
○諷誦章講義……阪本日桓
▲清淵眞雄師の意見書を讀む……究竟生
○御書時代の信念（其二）……古定賢正
▲日蓮宗の迷信的崇拜物……高鍋玄洋
○思連記（承前）……日蓮上人
▲佛教專門夏期講習會……
○日蓮大聖人（第十六回）……關田佛城
▲本山に於ける法號授與式……
○慶長宗論批判（承前）……文學士　辻善之助
▲各地教信……
○龍口夜半嵐……古定不新

御雛附ぞく小道具
人形
武者人形
東羽子板
御注文に依り調製致候
東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

廣告

自今編輯事務も左記にて取扱ひ申候間原稿通信等凡て全所宛にて御送附を乞ふ

東京淺草區南松山町　統一團

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢　十二冊前金六十五錢　郵券代用は一割增但五厘切手を其とす
一講讀申込の節は住所姓名を楷書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅七年六月十五日印刷發行
發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木曄學
印刷所　北澤活版所
東京市淺草區南松山町四十五番地
發行所　統一團

發行所東京市淺草區南松山町四十五番地
統一

其時に諸天虛空の中に於て高聲に唱へて言く此無量無邊百千萬億阿僧祇の世界を過て國有り娑婆と名く是の中に佛まします釋迦牟尼と名け奉る今諸の菩薩摩訶薩の爲に大乘經の妙法蓮華敎菩薩法佛所護念と名くるを說き給ふ汝等當に深心に隨喜すべし亦當に釋迦牟尼佛を禮拜し供養すべし彼の諸の衆生虛空の中の聲を聞きて合掌して娑婆世界に向て南無釋迦牟尼佛南無釋迦牟尼佛と唱へ給ふ

（法華經如來神力品の一節――經典和譯の一）

主義

勸信要義

本多日生口述
山根顯道筆受

第十二節　佛陀の慈悲を基礎となせる諸種の勸信說（承前）

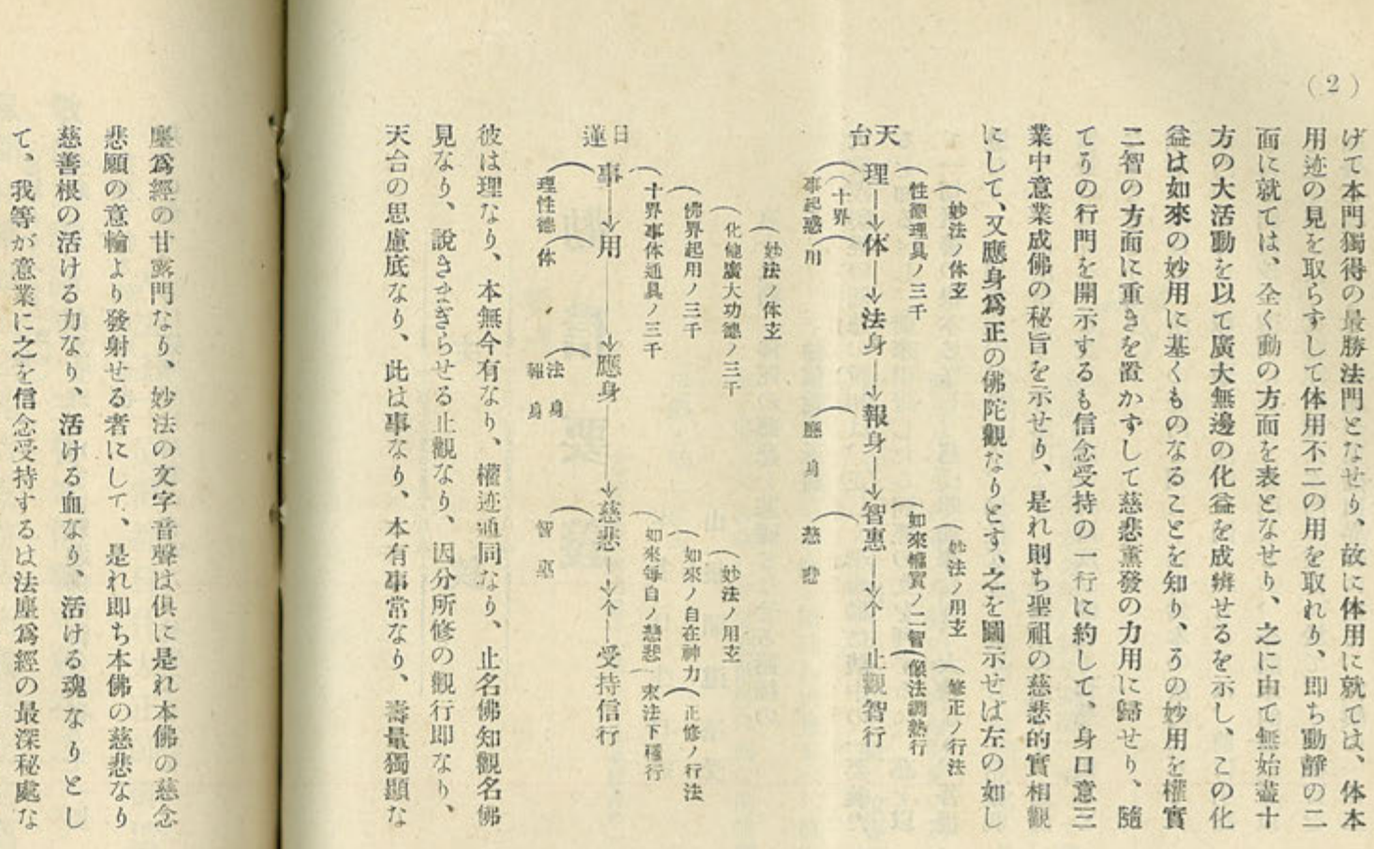
大般涅槃經の圓慈の說相は、正しく聖祖勸信談中の一要義たるを知るべし、前來引證したる同經の文を拜するに、慈を以て一切諸善の根本となし、慈は即如來なり、大乘なり、菩提道なり　一切衆生の父母なり、佛性なり、大空なり、常樂我淨なり、佛法僧なり、甘露門なり、菩提無上の道なり、諸佛無量の境界なりと說き、又諸の神通及び佛智も皆慈を根本となすことを示せり、

涅槃の經旨は、法華の迹門と同じく法身爲本の法門にして、本門の妙旨たる報應顯本の法門に同じからざるは、前に引證したる開目抄の聖判に在りて分明なるが、今顯本的智眼を以て之を照さば、文在涅槃義在本門の主旨に於て、うの微旨を顯發し得べきこと、聖祖が稟權出界抄に於て、涅槃の一体三寶の文を引き、之を指して重ねて法華經の壽量品を宣說し給ふ文なりとの妙判に依て例知するを得べし、

聖祖が勸信談中慈悲を基礎となせるものは、尤も廣くして且深き意義を有せり　聖祖立宗の生命たる妙法蓮華經の体用を開明することは、我敎學上の最重最高の法門に屬せり、この妙法の法体及び力用は、如何に說明せられたりやと云ふに全く慈悲爲本の旨致に外ならず、されば涅槃圓慈の說相を開展したると同一旨致に歸せり、其は法体上の說明に於て、天台は法性の妙理を本とし、十界の事体を迹とし、十界の中には九界の起惑より生起を論じて菩薩道に入り、法性の妙理を解し又之を證して玆に始めて如來の妙覺ありと說き、三如來に於て不縱不橫を說くも、体用の中には体に約して三身並常を宣ぶるものにして、其實法身毘盧の一本に歸し、報應の無始實在を示さず、即ち体用の中に用は迹なり末なり有始なりとの旨致に歸し、而してうの用に於ても、如來の權實二智を採りて、之を如來の妙能と稱し法華の勝用となせり、隨てうの行門は智惠觀念を以て正規となせり、

之に反して、聖祖は法性の妙理を捲て之を十界事体常住の內面に具有せりと說き、理本事迹の說を貶して迹面の敎義となせり、而してこの十界事体常住の中には、九界起惑の生起を排して佛界起用の法門を立せり、されば三如來に就ては法身爲本を以て迹權一致の說相なりと談じ、報應顯本の妙旨を揭

げて本門獨得の最勝法門となせり、故に体用に就ては、体本用迹の見を取らずして体用不二の用を取れり、即ち動靜の二面に就ては、全く動の方面を表となせり、之に由て無始盡十方の大活動を以て廣大無邊の化益を成辨せるを示し、この化益は如來の妙用に基くものなることを知り、うの妙用を權實二智の方面に重きを置かずして慈悲薫發の力用に歸せり、隨てうの行門を開示するも信念受持の一行に約して、身口意三業中意業成佛の秘旨を示せり、是れ則ち聖祖の慈悲的實相觀にして、又應身爲正の佛陀觀なりとす、之を圖示せば左の如し



彼は理なり、本無今有なり、權迹通同なり、止名佛知觀名佛見なり、說きさきらせる止觀なり、因分所修の觀行即なり、天台の思慮底なり、此は事なり、本有事常なり、壽量獨顯なり、每自の悲願なり、有の儘の妙法なり、果分所具の名字即なり、迹佛の非思慮底なり、彼は無明起惑の緣起論なり、此は佛界起用の緣起論なり、彼は法性性德理具の實体論なり、此は十界常住事具の實体論なり、彼は迹中一世の化益なり、此は無始盡十方の大化益なり、彼の功德は狹少なり、此の功德は廣大なり、彼は衆生心性因分の佛性論なり、此は本佛果上の妙智顯の下種論なり、彼は像法調熟の行相なり、此は末法下種即脫の行相なり、彼は如來の權實二智の妙能を取り以て止觀の智行を成辨せんとし、此は如來の每自の悲願を緣じて受持の信行を點示せり、彼は眞如內薫の力を取り、助緣の爲めに一体三寶の外護を仰げり、此は本佛每自の念願力を取りて感應主となし、この本佛の身口意の三輪より起れる自在神力を以て、妙法蓮華經の五字を唱題と受持との三業に感應して、不知不識の間に廣大の功德を受得せしめ給ふことを示せり、妙法蓮華經は佛の神なり、佛の意なりとは、意輪の方面に於て妙法を勸信せるなり、妙法蓮華經の五字は金色の如來なり、持經即持佛身と說くは、乃ち妙法を身輪の方面に於て勸信せるなり、妙法蓮華經は本佛の大梵音中の大梵音王として口唱を奬勵せるは、妙法を本佛口輪の方面に於て勸信せるなり、妙法の聲音を本佛口輪の勝最梵音として唱題する口業は、聲塵爲經の醍醐味なり、妙法の五字を即佛身として恭敬尊重する身業は、本佛の身輪に對する觀佛三昧王にして色

塵爲經の甘露門なり、妙法の文字音聲は俱に是れ本佛の慈念悲願の意輪より發射せる者にして、是れ即ち本佛の慈悲なり慈善根の活ける力なり、活ける血なり、活ける魂なりとして、我等が意業に之を信念受持するは法塵爲經の最深秘處なり、されば我等が妙法蓮華經の文字を眼に拜する時、觀佛三昧王の甘露門に入り、又妙法蓮華經の聲音を耳に觸るゝ時、最勝修多羅の醍醐味を獲、更に妙法蓮華經の文字聲音は、俱に是れ本佛の功德の結晶体なり、本佛の慈悲なり、慈善根の活力なり、活ける血なり、活ける魂なりとして、我等が意に信念し奉る時、敎觀の最深秘處玆に現在前するを得ん、

前來記述するが如く、妙法蓮華經は如來の三輪を表彰し、三塵爲經の精妙を開示し、我業三業所修の所對をなせり、されば聖祖の勸信談中には、この三業の所修りの何れに就ても、表德的說明の場合には必ず成佛得道を許し給へり、然れども安心の正意を確立するに當りては、必ず信心成佛の一意を明示せり、文字に就ては禮拜等の身業成佛を說き、音聲に於ては唱題の口業成佛を說き、意業の對象としては、本佛の大慈大悲の念願を緣じて起る信念成佛を示せり、而して身口二業の成佛は安心上の正意にあらず、必ず信念意業を以て成佛の正因となせり、されば古來信念成佛と云ひ受持成佛と云ふを以て安心談を歸結せり、受師が事觀錄の所論全く此旨致に在り、玆に於て乎信念成佛家の唯一所對は、實に本佛の慈悲に賴るの一途あるのみとの指敎愈力あるを見るべく、隨て涅槃圓慈の說相の如く、一切の善根　一切の佛智　一切の法体　一切の行法　一切の敎門　悉く本佛の大慈に歸趣し、爰に慈悲的妙法論、慈悲的三千論、慈悲の實体論、慈悲の緣起論、慈悲の佛陀論、慈悲の行門論、慈悲の敎判論等を領得すべきなり、

今色塵爲經の主意に依り、妙法の文字を以て如來の身輪なりと勸信し給へる聖判を紹介せん、

法蓮抄（內十五卷二十三丁）今の法華經の文字は皆生身の佛也乃至若有能持則持佛身等云云

開目抄（內二卷四十八丁）六萬九千三百八十四字一一に皆妙の一字を備へて三十二相八十種好の佛陀なり

守護國家論（內十卷三十三丁）一心に法華の文字を念せよ乃至此經は諸經の文字に似ず一字を誦すと雖ども八萬寶藏の文字を含み一切諸佛の功德を納むる也

唱法華題目鈔（內十一卷四十四丁）今法華經は四十餘年の諸經を一經に收めて十方世界の三身圓滿の諸佛をあつめて釋迦一佛の分身の諸佛と談する故に一佛一切佛にして妙法の二字に諸佛皆收まれり

妙法曼陀羅抄（內二十八卷五十）一の仙藥を留め給へり所謂妙法蓮華經の五字の文字也

又聲塵爲經の旨趣に依り、妙法の聲音を以て如來の最勝口輪

なりと勸信し給へる聖判を引證せん、

守護國家論（內十卷三十四丁）佛の入滅は既に二千餘年を經たり然りと雖ども法華經を信ずる者の許に佛の音聲を留めて時々刻々念々に我が死せざる由を聞かしめ給ふ

十章抄（內三十卷二十九丁）日本國の在家の者には但一向に南無妙法蓮華經と唱へさすべし名は必ず躰に至る德あり

題目抄（內十一卷初丁）小乘の四諦の名計を嚙ずる鸚鵡猶天に生る乃至何に況や法華經の題目は八萬聖教の肝心一切諸佛の眼目也汝等之を唱へて四惡趣を離るべからずと疑ふ歟

又法塵爲經に就ては左の聖判あり、

本尊問答抄（內九卷十九丁）佛は身也法華經は神也

又聲色法の三塵爲經列擧の聖判あり、

梵音聲抄（內十九卷五十二丁）此大梵音聲一切經と成て一切衆生を利益す其中に法華經は釋迦如來の心中の本懷也（聲塵爲經）

此御音を書き顯はし文字と成し給ふ佛の御心は此文字に備れり譬ば種と苗と草と稻米とは別々なれども心は一也釋迦佛と法華經の文字とは形は異れども心は一也故に法華經の文字を拜見せさせ給はゞ生身の釋迦如來に値ひ進らせたると思召すべし（法塵爲經）

全鈔（五十丁）如意寶珠と申すは釋迦佛の御舍利也乃至一切衆生を扶る珠と成る也

斯くの如く、妙法蓮華經は釋尊の舍利なり梵音なり意なり、而してこの形聲の二益は、如來の化益に於て外面に應用せられたる所なるが、うの內面に活動せるものは、如來慈念の意輪なり、故に如來の感應は慈悲を源泉として之を說き、如來の神通は慈悲に約して用の宗要を論す、用の用は身口の神通力なり、用の宗は如來の意輪に於ける神通力なりとす、斯くて感應の源泉神通の中心一に慈悲にあるを見るべし、佛意とは佛智なりとは台家の法門なり、佛意とは佛の慈願なりとは當家の法門なり、されば我等が三業に於て何れも成佛の益を說くも、又撰取して正意を結成するに當りては、聖判明瞭に此間の歸趣を示せり、

四信五品抄（內十六）信の一字を詮となす

又曰一念信解と初隨喜と此二處云云

本尊抄（內八）此五字を受持すれば云云

法蓮抄（內十五）信なくして此經を行せば手なくして寶山に入り足なくして千里の途を企つるが如し

題目抄（內十一）夫れ佛道に入る根本は以信爲本乃至設ひ悟りありとも信心なきものは誹謗闡提の者也

顯謗法抄（內十二）此は信じて而かも信せざる者也

（本節は尙ほ次續して御遺文する所あらんとす）

大法主二位僧都日什大正師御遺文（諷誦章）

敬白請諷誦事。三寶衆僧御布施在之。

風聞一乘妙法之花者芍芬々而薰三土之舊菌本覺顯照之月者光明々而朗寂光青天實敎之冲微不可測量者歟。

伏惟。日妙上人遷化之後愁淚未乾一回早到。聊押悲淚以修菩提之資粮。所謂奉圖繪寶塔大漫荼羅一幅。奉讀誦妙法蓮華經一部。方便品一十二卷。壽量品一百二十卷。十如是一千二百卷。自我偈一萬二千卷。題目一億二萬遍。奉書寫南無妙法蓮華經一萬二千遍。奉造立率都婆一本。然大漫荼羅者幽儀存生時奉書寫之處。聊欲展供養儀式捧追善此漫荼羅惣雖亘二所三會之說相別專顯虛空一會儀式。凡寶塔者妙法所在之宮殿。諸佛恒居之心城。薩埵來集之住所。五輪本分之全體也。多寶者乘此塔垂證明。釋尊者召分身開塔戸。竝二佛塔中唱付屬有在。擧六難九易。求末法導師。顯提婆龍女之得益。奏一乘妙法之流通。迹化諸聖求弘經。自述惡世之方軌。文殊者開章問。請方軌。世尊者說四法。勸始行。是則迹門流通之說相也。次止過八恒沙之弘經。召本化寂光之地涌。因彌勒不知之疑問。顯釋尊久成之遠本。宣三身即一之應用。顯塵點久遠之大悲。校量一念信解之功德。述歎轉展隨喜之勝利。明六根互用之勝德。引不輕大士之往事。擧而强毒之。々逆緣。顯逆即是順之圓意。現十種難思之神力。付末法弘通之要法。是則本門流通之大法也。其要法

者所謂題目五字是也。然此妙法蓮華經者三諦圓融之法体。性海果分之内證。萬行衆善之都名。本地甚深之奥藏也。是此本尊之本体也。次釋迦多寶二佛者。先迹門意者。二佛居一塔者境智不二之形。分身坐樹下者利益周遍之相。三佛三身之表德迹佛果成之質也。次本門意者。廢始覺顯本覺破迹佛立本佛本地難思之境智用無作三身之色心業也。所虛空者示此土体一之常寂光開遠本者顯三身一身之自受用也。應用豎高三世利益横遍十方次上行等之四導師者。最初實成之弟子。久遠證得之菩薩。結要傳受之大士。末法弘經之導師也。凡此大曼荼羅者。依正不二。人法一体。生佛一如。十界互具之大曼荼羅也。因茲謹聞其名人者。盡三妄執於一時一拜此像輩者。證三菩提於一念。頓極頓證之秘法。即身成佛之龜鏡也。次此經者。諸佛出世之本懷衆生成佛之直道也。讀誦者耳根相應之修行。此土有縁之善根也。書寫者法命久住之根源。憶持不妄之大善也。次題目者界如三千之本名。三身果滿之内證。本迹兩門之肝要。先師弘通之本經也。次率都婆者。本極法身之普門示現。三身周遍之三摩耶形也。佛力法力合力尊靈增進無疑。若然者日妙上人酬一乘所修之恵業者開一實菩提之覺花。答題目五字之勝業者。詠五智圓滿之覺月。七世師恩。生々父母。親疎有縁。過現檀越。普灑法雨。同成妙因。及以法界平等利益。便鳴三下之少鏡式驚三身之尊聞。仍諷誦所請如件。敬白。

嘉慶二年八月廿一日

大法主日什敬白

講演

諷誦章講義

阪本日桓師講演

増田聖道　速記

此度御招きに依り據なく參つた譯で、參つた處がれ前方に益になるやうな講演も出來ませぬから、折角に招待をしても何の益にも立たなんだと、斯う仰つしやられると私も不本意千萬であります、何分八十歳の老人のとであるから、其處は御推察を願はなければなりませんのぢや、

先づ開祖日什上人の諷誦章を御撰述になりました來歴を一寸御話をして、夫れから本文を講演します、開祖日什上人の此の諷誦章と云ふものを御撰述になりました來歴と云ふものはどう云ふ譯で御作りになつたかと申しますと斯うなのぢや、抑も此の開祖日什上人には日義、日仁、日金、日穆、日全、日妙と云つて上足六人の御弟子がありました、之を會津六老僧と申します、斯う云ふ御方々は或は他宗の人達や或は他派の人達であつて、何れも開祖日什上人樣の御高德を慕つて御弟子になられたのぢや、中にも此の日妙上人に對しては開祖日什上人樣が親ら剃刀をとつて、流轉三界中恩愛不能斷棄恩入無爲眞實報恩謝と唱へ、始めて出家得度をさせられましたのぢや、則ち大藏卿阿闍梨日妙上人と申すのぢや、此の御方はなか〳〵生れつき御聰明の御方で、利根にして頗悟の英才を懷かれた御方ぢや、加之身輕法重の責任を帶び、死身弘法の義務を果さんと思召して、御師範の日什上人樣と共に本佛出世の本懷宗祖日蓮大聖人所弘の三大秘法の妙法を天下に弘めんとして、東奔西走彼方に往ては大法の鼓を擊ち、此方らに來ては權門の敵城を攻め、數々法戰の大功蹟を顯はされたる青年有爲の大法將で在せられたのぢや、ぢやから吾開祖日什上人樣も齡七旬に餘れる老の身の弘法の樂み杖とも柱とも頼みに憑みし御弟子で在らせられたのぢや、うこで當時日妙上人は幾つであらせられたかと申しますれば、やうやく十五――六――七位で、十八歳の時分に不幸にして不治の病症に罹り、終に養生相叶はずして御入寂なされたのぢや、十八歳の時に遠州府中見付玄妙寺の貫主となつて、其所で終に御入寂になつたから、隨つて見付に御葬式になつたのぢや、此の時御師匠樣の日什上人御歎きなされて、日妙の如き才德兼備の豪傑は再び得られないと御惜みなされ、且其御志の拔群殊勝なるを感み、一方ならず慟哭し玉ひしをば恰度孔子の顏回の喪に於けるが如き有樣であつたかと想像しまするのぢや、夫は今其の諷誦文を擧て讀みますれば、伏惟日妙上

人遷化之後愁涙未乾一回早到聊押悲涙以修菩提之資糧一文實に此の御文を讀んで見えすれば開山樣が如何に日妙上人の御遷化を御愁歎なさつたか、分るのぢや、開山樣が如何にも日妙上人御遷化を御愁歎なされたのを見るやうな心持がするのぢや、ぢやに依て御師匠樣の日什上人は日妙上人の遷化を歎いて七々四十九日の忌も終り、百ヶ日の忌も參つて日妙上人の爲に讃誦章を御書になつたのぢや、うこで開祖日什上人樣は日妙上人の爲に二章の讃誦を御撰述遊ばされましたのぢやが、一は以て百ヶ日忌の追善に備へ、一は以て一周忌の菩提の資糧に御擬しになつたのぢや、是が則ち讃誦章を御撰述になりました譯なのぢや、二つには夫ればかりではない、夫れは何んぢやと云ふに、是は單文讃誦とあるから、爾うすると日妙上人の菩提の爲にのみ是は御書になつたのではないのぢや、則ち是は本宗所弘の宗旨の藏奥を窮め當家所立の冲微を述べ、門下修學の人の規矩を定め、末代行者の龜鏡に備へられたる甚深の秘書であるのぢや、末代吾々れ前方の學問修業の規則を立て末代吾等が如き行者の龜鏡に備へたるものが此の開祖の讃誦文であるのぢや、れ前方が始終一部修行從淺至深と云ふことを口には言ふがどこに在るのぢや、此の讃誦文より外にはないのぢや、ぢやに依てれ前方は之を能く研究されぬと我門流顯本法華宗の内に在て其の由來が知れぬ、さうなると寔に不本意千萬ぢや、ぢやかられ前方、は能く研究をしなさらなければならんのぢや、うこで此の讃誦章裏書の置文には

定

一門中可得心事　大聖人御門弟六門跡幷ニ天目等ノ一流皆依レ有下方執佛法共ニ背ク大聖ノ化儀ニ處上不ニ同心一也直ニ日什ハ仰テ皈ニ日蓮大聖人ニ處也門弟等可レ存ニ知ス此旨ヲ者也但シ於テ下總眞間ニ有ニ皈伏狀幷ニ起請文一雖レ然ト依テ違ニ法門幷ニ法帆大聖ノ御義ニ捨ル申ス處也是レ捨惡智識之眞ヲ也右日什之門弟等尋ニ此旨ヲ於ハ此旨違背ノ輩ニ者可レ爲ニ誘法墮獄ノ罪過一爲ニ後日ノ置文ノ狀如レ件

嘉慶二年戊辰八月廿五日

二位僧都　日　什　在判

と斯の如く吾開祖日什聖人の嚴誡なる御遺言がありますのぢや、是が此の書を御撰述になりました一の來歴でありますのぢや、

うこで此の讃誦文の文字は其數九百七十九文字であつて、たつた是ればかりの處に釋尊の一代の聖敎の肝心本佛究竟の深法たる開迹顯本の妙義を解釋し、本化所弘の三大秘法の奥旨を宣說したる難解難入奇特の秘書なのぢや、恰も久遠偈が五百十文字で開迹顯本の妙義を顯はしたのと同じであるのぢや開山日什聖人九百七十九文字の間に本佛究竟の深法一代聖敎の肝心たる開迹顯本の妙義を說かれたのぢや、ぢやに依て迂

濶々々してはならぬのぢや、文字の數は僅であるかられ前方は具さに記憶して御座れ、うこで假令此の讃誦文は熟讀暗誦しますとも容易に其の義を解釋することが難いのぢや、ぢやに依て我大日本帝國にて、當時宗門の三日達と言へる高評を博されたる豪邁の學匠の其一人たる吾が先師寂光寺日達上人が、れ前方私共の爲に此の書の註釋上下二卷を御著はしになつて、最とも懇ろに其の義を明に、其理を鄭重に御辨じになつてあるのぢや、ぢやが其の文廣博にして從つて義理も幽遠でありますれば、是亦初學の輩是を讀むも之を解するとなか〳〵六ヶ敷い、なか〳〵分らない、去り迚抛擲し措くべき事でなく尤も緊要なる事であるのぢや、ぢやに依て不肖老耄のうしろを顧みず此の講壇に臨み日達上人の註釋を本據と致し、且又壯年の時より諸先師に隨つて學び得し處の法義を交へ、註釋の廣博なる一丈の文を〳〵つて略の一尺の文を取り、又略の一尺の文を去つて要の一寸の文を取り、平易なる言葉を以て講演を致します、どうか其の御積りで御清聽を願ひます、是が先づ概略であります、暫時休憩して夫より本文を講じます、

（本文は本誌第五六兩頁に其全文を掲載す）

研究

「御書」時代の信念

其二

四條金吾の人格及び其信念（上）

「而るに左衛門殿は俗の中には日本には肩を並ぶべきものもなき法華經の信者也」とは日蓮上人か曾て四條金吾賴基を評論したまひしみ言葉也、吾人は四條金吾が果して「肩を並ふべきものなき法華經の信者」なりしや否やを知らずと雖も彼は確に當代に於て傑出したる信者たりしには相違なきもの〻如し、日蓮上人が彼に送り給ひし御書は、特に貳拾五通の多きに及び而して其書の文字彼に對して稱讃を極めたるもの多く、就中日常の生活に立ち入りて親切なる注意を與へたる如きは御書時代に於て他の信者に多く見ざるの事に屬す、以て彼が如何に上人の信者中に於て傑出したる解行を有したるやを知るべき也、

大學三郎も鎌倉武士なりき、宿屋光則も鎌倉武士なりき而して四條金吾も實に鎌倉武士なりし也、彼は北條の一門江間遠江守の御内に屬したる一武士也、日蓮上人の初め鎌倉小町の辻に出で〻熱烈なる雄辯を振つて諸宗叱吒の聲を大にし

給ふや、彼は實に最初の質問者なりき、而して忽ちにして彼は日蓮上人の信仰に入り新らしき靈の道を辿りし也、

日蓮上人か彼に對して其平常の生活にまで立ち入りて親切なる注意を寄せ給ひたる程の彼は亦上人に對して特に辿んでたる至誠を捧げたり、うは龍の口法難の時に於てなりき、

龍の口に於ける日蓮上人の法難は政治的宗教難なりし也之を單純なる法難と見たるもの從來往々にしてあれども、此等は當時の事情に詳しからざるの致す處也、吾人は今茲に新たに龍口法難論に筆を起すの暇を有せざるゆへ此等は且く後日の研究に讓るとして、進んで龍の口法難の場合に於ける彼四條金吾が言働を見るに、吾人は實に肅然として彼が人格に向て十二分の敬虔の念を寄與せざる可らざる也、

文永八年九月十二日の夜、日蓮上人は實に龍の口頸の座に其身を寄せ給ひき、而して四條金吾は鎌倉より從ひ來りて日蓮上人と共にあり、時刻は進みぬ、平左衛門尉及び依智三郎は容捨なく斬罪の處置をとるべく臨みたり、「種々振舞御書」は當時を語つて曰く、「左衛門尉曰くあはれ只今にて候ふ」と一句は實に力あり、而して簡單なりき、

日蓮上人は此時平然としてこれほどの喜びを笑へかしと言ひ放ち給ひたり、金吾は如何にこれをきゝたりしか、彼は餘りのみ言葉に尙一層悲痛の感を增したるべし、彼は此場合既に腹切らんと決心したりし也、日蓮上人と共に此穢き五尺の身を捨てゝ、金色の佛身を得んと願ひし也、吾人は今靜に當年の事情を思ふに、彼等鎌倉武士の理想は功名手柄をとらむと焦慮し、此功名手柄の爲には妻子身命をも敢て惜しまざるは彼等の通性也、かゝる性質を有せる鎌倉武士は一轉して其宗教信仰の前に腹切らんとせる性質を呈露したり、現世の野心みちみちたる鎌倉武士は、屢々謀叛といへる恐ろしき政事犯を起して當年の社會を震動したりしが、かゝる鎌倉武士の中於て、吾人は四條金吾といへる至誠熱烈なる信者を發見したりし也、鎌倉に於ける武士氣質は曾ては平氏を西海に追ひ而して新政府を關東の一角に建立したるほどの事とて、當年の社會に於ては實に花やかなる思想なりし也、想ふに吾人は四條金吾を以て鎌倉氣質の豪健朴素なる思想が特に宗教の洗禮を受けて至誠熱烈の內容を帶びるに到りしものと斷せざるを得ず、何となれば彼が如き至誠は多く得易からざるものにして、古來多くの至誠は決して浮華輕薄なる中より生れずしてむしろ仁に近き朴訥の中より生れたれば也、

「あはれ只今にて候ふ」といひて腹切らんと決心したる四條金吾は後年に至りて日蓮上人より感謝のみ言葉を送られたり、「四條金吾殿御返事」に「何事よりも文永八年の御勘氣の時既に相摸國龍の口にて頸切れんとせしにも殿は馬の口に付て足步赤足にて泣き給事、實に成らば腹切んとの氣色なりしにば、何なる世にか思ひ忘るべき」といひ給ふが如きは、如何に彼が心を動かせしか、「何なる世にか思ひ忘るべき」といふ深き心の奧より出でたるみ言葉は、金吾の心を動して直に

佛陀の大悲願中より迸り出づる言としてきゝとられしや疑なき也、彼や元來五字七字の光明中に生活したる信者也、而も此五字七字の光明は日蓮上人に依りて與へられたるもの彼が此光明の紹介者眞理の宣傳者佛陀の使者の大難に際して、共に其大難に隨はんとせしゃ、一は自己が信仰生活の生命となれる光明と眞理と佛陀とに殉死せむとしたりし也、而して今日蓮上人より「いつの世にか思ひ忘るべき」といひ給ふ言葉をきく、いかでか蓮上人と通じて佛陀大悲の聲をきかざらんや光明の實躰、眞理の光顯たる佛陀大悲の聲は、此一句を讀みたる一刹那に於て四條金吾の靈感に宿り而して永劫不滅の信念を得たりし也、

龍の口に於ける四條金吾の言働に感激して「何なる世にか思い忘るべき」といひ送り給ひたる日蓮上人によりて四條金吾は再び熱心なる感謝を送られたり、「同地獄抄」の一節に「返す返すも今に忘れぬ事は頸切れんとせし時殿は供して馬の口に付て泣悲み給しかば、如何なる世にも忘れ難し、設ひ殿の罪深ふして地獄に入り給はゝ日蓮を如何に佛に成れと釋迦佛誘ひさせ給とも用ひ進らせ候へからず同地獄なるべし日蓮と殿と共に地獄に入るならば釋迦佛法華經も地獄にこう御座さんずらん」といひ給へり、吾人は此消息を讀みて轉た人生の大いなる事實にふれたるの感なくんはあらず、何となればかくの如き日蓮上人の感謝のみ言葉は、實に世界聖典中まれに見るのみ言葉なれば也、「設ひ殿の罪深ふして地獄に入り給はゝ日蓮を如何に佛になれと釋迦佛誘ひさせ給とも用ひ進らせ候べからず同地獄なるべし」とは如何に甚深にして熱烈を極めたるみ言葉なるぞや、四條金吾はこの御消息を手にして如何に泣きたりしぞ、彼は斯の如き甚深なる同情を注げる感謝のみ言葉を通ふして直に佛陀大悲の願中に容易に入る事を得たりし也、然り彼が信念は其宣傳者の溫き血を通ふして溫かき大悲の佛陀を意識したりし也、罪深ふして地獄に落つるとも金吾一人はゆくべきぞや、吾師日蓮上人も共に地獄にゆくべしといはれしなり、吾は今地獄に於ても日蓮上人と共なり極樂に於ては尙日蓮上人と共なりといへる一片のの信念は如何に賴みあるうれしき力ある信念ならずや、轉じて日蓮と殿と共に地獄に入るならば釋迦佛法華經も地獄にこう御座さんずらん」といへるに至つては吾人は如何に力のこもりたるやを見ざる可らず、釋迦牟尼佛いかで地獄に入り給ふべき併しながら吾と金吾と若し地獄に入ることあらば佛陀も共に入り給はんと、既に佛陀あり、日蓮上人あり、而して「日本に肩を並ぶべきものなき法華經の行者たる」四條金吾あり地獄は最早地獄ならざる也、地獄と思ふ處は本有の靈山淨土なりし也、而も吾人はかゝる理談に墜る可らずして、唯眞面目に四條金吾其人の心靈上の實感を見ざる可らず、彼や斯の如き同情ある感謝に逢ふて其惡業深重の身罪惡無量の身は佛陀大悲の願に於て必ず救はるべしとの信念を强ふせし也、何となれば君し我地獄にゆく程ならば靈山淨土の釋迦牟尼佛日

蓮上人も共に地獄に墮ちさせ給はんと思へば也、罪深きは四條金吾一人にあらざる也「御書」時代の信者は皆罪深ふして地獄に墮つるもの也否獨り「御書」時代のみにあらざる也、世の一切の人類は皆罪深ふして地獄に墮つるもの也、かゝる人々も五字七字の光明中に生活し佛陀大悲の願海に棹すことを得たらむには其人生はやがて四條金吾と同じ信念に住することを得む也、是四條金吾に與へ給ひたる同情か同時に吾人に與へらるゝものにあらずや、

吾人は此御消息に於て注意すべきは信念の皷吹を正面よりせずして反面よりせられしこと也、即ち平等觀より信念を皷吹せずして差別觀より入りしこと是也、罪深ふしてといふ言葉は如何に悲痛なる響を以て彼の心頭に入りしや、而して地獄に入り給はゞといひし言葉は前の悲痛に幾倍したる悲痛の情に更に大いなる驚愕の心を添へて彼の心靈にひゞきしや此悲痛と此驚愕とは實に信念の決定する歡喜の門に入るまでに必ずなかる可らざる情緒也、惱みを得ざる喜びは眞の喜びにあらざる也、悲痛の惱み驚愕の惱みを經ざる歡喜は其歡喜を味ふ時極めて無意味也、是信念に於て罪の身たる事を意識したる後の信念にあらざれば其信念や殆んと價値なき所以也而して此四條金吾に與へたまひたる御消息は此深き深き意義を語りつゝあらずや、（上、終）（不新）

清瀬貞雄師の應答書を讀む

播磨究竟生

清瀬貞雄師は統一第百四號の誌上に掲載せる所の貴名志堅君が内藤智厚君に對し教義上の質疑を爲せる要項に付き、統一第百八號の誌上に於て回答應募者の第一人として該應答書を登載せられたり、余輩師の所說を數番繙讀せしに固より賢明なる師か該博なる學識と緻密なる觀察とを以て比較對照辨難駁擊の應答文章なれば管見の余輩敢て論議を憚るところなり意ふに師は唯質疑者に對し或は攻擊するか如く或は慰諭するか如く誘導するか如くにして宛然慈母の赤子に於けるに似て尙ほ未だ龍象の全力を盡さゞるものゝ樣なり、

抑も師は質疑者の示せる第一號より第十四號に至るまでの典據引證の文を全然杜撰誤謬と轉計曲解の二句を以て其の主唱の軌道を脫し居ることを斷破されたり、余は典據と引證か將たして其當を得たりや否やは今茲に論せず、聊か師の應答に就て多少了解に苦むところの點あるを以て、左の三項に於て辨せんと欲す、

第一　本迹　第二　壽量　第三　開顯

(1)夫れ釋尊聖教の判釋中に本迹は最大要義の法門にして之に據て佛陀の本懷も實相の妙理も施化の始終も總ての無盡實義の法門か本迹判釋上に究極し徹底するものなれば、經文釋義

の關鍵樞軸と謂つ可きなり、爾るに或る論者は本迹の如きは畢竟一念三千觀の体相を標準する教相上の所談なり、本化の神髓に非す門外家に對しては其要を見るも門内者に在ては研究の價値なきものとし之を疎漫し之を淺視し動もすれは忽緒に付し去るの徒輩あり、想ふに此等の徒は總ての法門か本迹判釋の地盤上に明確なる立論を築くを識らざるの言にして、而も教相を貶排し教理を偏崇するの極は遂に巧に辞解を文飾し、甚しきは勗めて世の學說に適合するを至れり盡せりと爲し、聖教洪判の教相を一種の學式の如く想像を謬り恰も孝經を破棄して孝を論するが如く可憐なる空想の觀念に陷るに至る者なり曾て宗祖上人は是を誡責し給ひて曰く、

黑白の如く明に須彌芥子の如くなる勝劣尙ほ迷へり況や虛空の如くなる理に迷はざるべしや經の淺深を知らされは理の淺深を辨ふる者なし云云

先つ教判を明にして而て後に教理の淺深は從て了知せらるゝものなり、

案するに本迹は壽量品の教主佛陀の人格上に於て發展し給ひ所謂る久遠と近成との相を以て分解する者なれば、本迹は即ち唯是れ久近の不同なり佛陀か開迹顯本に依て久遠常住を示すに、過於東方五百塵點を擧くれとも過去遠々の表象にして實には無始無終の古佛なり、佛陀か久遠顯本と同時に本因本果の久遠自行の證智佛德たる本法の妙法自ら彰れ、眞の一念三千實現す、師弟の遠近不遠近の教相は審に斯意を判す、即是壽量品の正明本迹、宗祖聖人か法門の第三の法門也、尙ほ宗祖聖人は分明に久近本迹の相違點を示し給ひて曰く、

若病抄云於二法華經一又有二二經一迹門と本門と也本迹の相違は水火天地の違目也乃至今本門と迹門は教主已に久始のかはりめ百歲の翁と十歲の幼兒のことし弟子又水火也土の前後無二云計一本迹を混合するは水火を不レ辨者也云云

是に依つて之を觀れは本化聖祖の本迹觀は正く久近本迹なることは知らるゝなり、天台大師本化出興の先序として理事等の義を以て六重に互り層々に本迹を搆成し、殊に第六重に已今本迹を說くと雖も、但理を主眼とする迹化の導師なるか故纔かに壽量顯說の時間に約し（師の謂ふ所の新古の相違）進退高下し未だ全く壽量本迹の意を盡さず、宗祖聖人は天台傳教は粗ほ之を之を示せとも未た事擧らすと評破し給ひぬ、如斯明々赫々たる本迹に於て世間往々に躰用理事等の義に憑り正義を誤り混淆一致の本迹論を主張し、迷惑するか故に本化聖祖の正義を顯揚せんか爲めに久近を以て綱格と定む、

爾るに師か久近本迹觀を應答書に就て評擧するに師は曰く

久近家の所論は彼の台家常判の六重本迹の中の第六已今本迹の一のみ宗祖の御本意なりとしてこの已今本迹に依りて久近本迹を立てたるものなり

と既に已に余か如上の解釋に於て久近本迹は本化觀の本迹なること確實なれは、師の此評破は根本的無用に屬す然して師の此說を爲すは久近本の義を確むる爲めに台祖の判釋を助證引據せしを恐らく誤見せしならんか、尙師は久近迹其ものか、依憑根本誤謬と偏取用の誤謬とを評破し曰く、

久近本迹論に依憑する其心得が根本的誤據になり居るのみならす、六重本迹中、獨りこの第六の已今本迹のみか宗祖

の本意なりとして、他の理事本迹なり躰用本迹なり等は本意ならざるが如きに論するは、根本的に誤れるものゝ甚しきなりと、

是れ余輩の首肯すること能はざるところ何となれば本化の正意は久近に非されは根本的に壽量の本迹を明に爲す能はず、師の久近觀に對する所見か根本正鴻に於て誤見になりをりて本化聖祖觀の法度外に一種の學見あるかの樣に久近家々々と稱せらるゝは抑も師の誤ならん、師は注意的に久近偏取專用の不可なるを辨せらるゝも余輩は師の本迹觀の餘りに空漠に普通的(縱令與容の論鋒とは云へ)なるに驚かさるを得す、而して其久近本迹を許し去り論し來つて師自己の定見を提起し曰く、

本迹別頭の敎觀を叩きて其眞相を拜し來れは、台家常判の六重本迹論以上に於て別に大に超絶せるもの在りて存する也、

と夫れ然り然れとも其の超絶の標點をも擧けさるは後進指導者の師に於て深く理由の存するならん乎、宛然懷裡に鋭刀を藏めりとて威嚇するに異ならす、尙ほ又質疑者の說に付隨して曰く、

久近家は唯久近の重のみに於て台當の異目あり、宗祖亦これに依り給ふ如く論すれとも決して然らす、理事本迹體用本迹等に於ても同樣なり、唯其解釋に依りて本化的となり亦迹化的ともなるの異目を生するなり、

と是れ久近而已に固執すへからす、廣く六重に亘り解釋如何により台當の本迹を成立せしむとの意なり、師よ如何に付隨の言とは云へ苟も信仰を以て立脚とせる宗敎家の採用すへからさるの言ならすや、如何に解釋の巧を施すとは云へ彼の華嚴經の心如工畫師の文に於て互具の三千を談するを許さす、固より敎說に其範圍を有し本化は本化迹化は迹化と限度のあるあれば、之を超脫逸出すへからす、台祖すら餘は義立の本迹と嫌ひ給ひしにあらすや、況や本化地涌の再誕聖祖に於てをや、

師は例證として理事本迹を擧て台家と當家との本迹の相違點を評論せるも、畢竟理事躰用の生起本末の關係を說明せるのみに過きすして、毫も壽量品上の本迹として窺ふの價値を有せさるなり、事理は三千論に親しきも本迹論には寧ろ迂遠なりと謂ふ可し、終末に於て師は曰く、

已今の重固よ　久始論に親しきとは難とも豈に獨り己今の重のみか偏して宗祖の本意なりと謂ふを得へけんや、要するに己今の重と他の重とを問はす其取義解釋に依りて台家の主義ともなり當家の主義ともなるのみと、

夫れ師は先に久近本迹か由來根本的に誤據と論斷し、尙ほ其專取を破斥し、而て茲に於て從容寬假の辨疏的に斯く論斷するは前後矛盾の斷定ならすや、嘻々師の久近本迹に對するの所見は其根本に於て正鴻を誤れりと謂ふへきなり、以下次號

豫告

次號の本欄には古定賢止の佛敎理史上に於ける「金剛錍」の位置といふ一論文出つべし

論壇

釋尊研究論

佛敎に於ける人格論の研究は其萬有論の研究と相並びて實に忽緒に附すべからざる問題也、想ふに佛敎に於ける人格論の多種多樣なる佛敎が特に哲學的思辨の結果萬有神敎的傾向に流れたるよりして宇宙論の具象化的思想より種々なる人格論顯れたるなるべしと雖も、一步進んで時代信念の趨勢を考へ人間甚深の要求より察すれば、彼等は枯淡なる純理の思辨にあきたらずして靈妙活動を欲するの思想に移り、救濟と解脫とを求めんとするの欲望より斯の如き種々の人格論を造りいだせし也、

吾人は今玆に全佛敎に於ける人格論の偉觀を見、其が變遷を考へ其が佛敎上に於ける價値を批判するの暇を有せすと雖も、佛敎に於ける人格論の主躰を爲せる釋尊の研究に就て聊か今の宗敎學壇に意見を開陳せむと欲する也、釋尊研究の事や實に重且大なる問題にして、全佛敎の出發點を爲せるのみにとゞまらす亦能く全佛敎の到着點を爲せるものなるに、從來敎壇の學者がひたすら萬有論の系統を明にするにつとめて此釋尊研究の聲杳として聞へざりしは、げに遺憾の極みといはざる可らす、

今や佛敎の勢力世界の到る處に發展し多數の信者を有せる事は事實也、吾人倩ら思ふに斯の如き勢力を世界の心靈界に張る所以のものは佛敎經典の散布せられたる故にもあらず佛敎敎理の高遠なる故にもあらず、佛敎僧侶の紫衣緋金襴の美々敷ゆへにもあらずして、實に釋尊が此世界に降誕して迷へる一切の人類を救濟し且解脫せしめんとせられし言働其もの〻大いなる事實が今に到つて尙人類の思想に響き居れば也既に然りこの大いなる事實は今に尙强大なる響を人類の思想に傳へ、此響を通じて高遠なる敎理始めて活き、散布せられたる經典始めて活き、而して僧侶亦更に活きつゝあるにあらずや、吾人は此釋尊の人類救濟の一大事實が佛敎の出發點を爲せるにとゞまらず亦能く其到着點を爲せるものと信ずる也何となれば救の力を欠ける宗敎は既に人生に自存するの能力なければ也、而して實に佛敎は世界の一大宗敎なれば也、

かゝる人類救濟の甚深なる一大事實に逢ふたる上代の人々は深く此大いなる事實に感じ、而して考へ且思ひ、終に佛身常住の理想を描きたり、嗚呼佛身常住の理想の出現に逢ふて吾人は如何に彼等が釋尊の人格を尊重し釋尊の救いの力を信じたるやを見ざる可らず、かゝる單純なる佛身常住の理想はやがて三身論を生み淨土論を生み而して終に多種多樣の人格論を生みたりき、かくて年月を經るに隨ひて釋尊の名は漸く消へむとするの機に臨みたりしがこれらは皆多種なる人格論の影響にして時代信念の理想がやゝ移り轉ずる場合が生みたるものにして、吾人は此間の消息を研究するに銳意努力せざる可らす、是人格論變遷史の一期にして同時に信念上に於ける理想の一轉機なれば也、

北方佛教の發展が種々の教系を產みたる結果として佛教の出發點を爲せる釋尊は此等の教系に入りて如何なる位置を與へられしや是吾人が大に注意すべき問題也、見よ眞言の教系に入れる釋尊は如何に解釋せられしや、大日釋尊の位置は果して佛教發展史の上に於て論理上確認せらるべきものなるや、大日本質の三身論と釋迦影像三身論とは三身論の歷史に於て吾人は其妥當なるを認むべくや、之を要するに眞言教系に入れる釋尊は大日本佛論の影となり前座となり、釋尊夫自身の本願たる人類救濟の思想は其根底を打破せられたるにあらずや、吾人は釋尊を研究してかゝる特殊の立場に入り、其是非を判斷せざる可らず是實に容易ならざる問題たる也、

更にかの淨土教の教系に入れる釋尊は其彌陀本佛論と相對して如何なる位置を與へられしや、淨土教に於て七祖の第一位に置く龍樹が其著大智度論に於て釋迦一佛論を主張したるに係らず淨土教は終に彌陀本佛論の主張に向て全力を注ぎたり、七祖及び親鸞の彌陀觀は多少の變遷あるにもせよ其彌陀本佛論を主張したる上に於ては互に一致したり、かゝる傾向を有せる淨土教は亦かの眞言の教系と同じく釋尊を以て第二位に置きたり、佛教人格論に於ては彌陀本佛論をとり佛教本尊論に於ては彌陀本尊論をとりて而して釋尊を以て彌陀の化身たらしめ、釋尊の人類救濟の一大事實を以て彌陀本願の分派たらしめたり、吾人は釋尊解釋の上に於てかゝる議論を是認すべくや、彌陀本佛論の響と釋尊本佛論の響とが人類思想の實感を動すに於て如何に差異を生ずべくや、吾人は主として此間の消息を研究して正當なる結論を得ざる可らず、

かくの如く大日本佛論、彌陀本佛論の佛教發展史に顯れたる所以のものは何ゆへなるかといふに、是皆上代信仰の理想たる佛身常住の點よりして來りし事を思はざる可らず、佛身常住の理想はやがて釋尊の御身の解釋に移りしがゆへに此結果として釋尊の本躰如何といふの說に轉して即ち大日となり彌陀となりし也、かゝる出發點を有せるにも係らず其到着點に到りて思ひきや異なる結論を與へられたり、即ち釋尊の御身の解釋は直ちに轉じて彌陀本佛論となり大日本佛論となりたりし也、而も彌陀といふも大日といふも皆釋尊を解釋せむとしたる結果得たる理想にして釋尊を離れて亦斯の如き理想は得ること能はざる也、吾人は大日に到着し彌陀に到着したる理想を今一歩進めて何故に彼等は釋尊本佛論の域に進まざりしやの疑問を起さざる可らず、彼等は手段を以て目的とし目的を以て却て手段としたり、是吾人が釋尊研究論上に於ける忽緒に付す可らざる問題なりと思惟する也、

事實は歷史に現れたるものをとらざる可らず、理想の信仰理想の佛陀は人類救濟の能力を認められる上に於て其釋尊が人類救濟の思想の下に努力せられし事實に比して大いなる差異あることを知らざる可らず、否理想の信仰に描かれたる人類救濟の事實は現實に於ける救濟の事實を基本としたるものなれば現實に於ける事實を離れて理想の救濟はあらざる也是吾人が釋尊研究論の上に於て注意すべき問題にして釋尊の行ひ給ひし事實は其現實の場合にも其理想化の場合にも俱に釋尊の御身を基本として論ずべきものにして理想化の場合は大日若しくは彌陀の名に於て論ずべき道理は斷じてこれあら

ざる也、歷史の響は現實の響なり吾人は歷史の上の人格に接して救濟の意思に逢着せざる可らず、吾人は此意義に於て特に釋尊本佛論を主張し同時に釋尊本尊論を主張せざる可らず

之を要するに釋尊の研究は刻下宗教教學壇上の急務也「本行集經」をよみ「佛所行讚」をよみて上代の信念が釋尊を解釋するに如何に敬虔濃厚の念を以てせしやを見、轉じて人格論に入りて釋尊中心論の妥當なるを見、更に轉じて佛教本尊論に入りて釋尊の位置を見、而して佛教上に於ける釋尊論の歸結を告げざる可らず、吾人は救濟の能力なきは宗教にあらざるを思ふとき如何にしても釋尊を離れて佛教を解釋するの不可能を思ひ敢て江湖に對して釋尊研究論を公にする所以也

（記者）

記者は本佛論の意義と本尊論の意義とを二樣に見たり

法話

思連記（承前）

故本昌院日達上人著作

不斷臨終の心得

其外生あるものは必ず死するためしなり　何物か生き殘るものあらん　唯今も知らぬ身の上なりと彼一期の臨終の通りをかぬ〳〵心得て　起臥の折からも立居のふしにも總じて行住坐臥の度ごとに　時は只今、日は今日、一息不返名爲臨終、少病少惱得善知識、前念臨終後念成佛、本門壽量の南無妙法蓮華經と唱へて　誠の一期の臨終の時も遠さにあらず只今なりと心得　折にふれ事につけて常恒不斷に臨終の題目を唱ふれは彼まことの臨終の折からにたとへ如何樣の事にて死すとも　不斷の臨終の題目を唱へれく功德によりて　もろ〳〵の煩惱業苦を悉く滅して　覺の佛となるべき事疑なき次第なり　之を一期と不斷と一位成佛とは申すなり　此事が臨終の沙汰の中に一つの大事とする事なり　不斷に後世を願ふと云ふも是なり　されども人々氣もつけずうか〳〵と題目を唱ふるは　同じ事にも臨

終の砌あしからん　人の爲にも嘸かし心ざしうと〳〵しくて後世菩提の道覺束なき事なり　さる程に後世を願ひ臨終正念を常恒祈るなり　されば罪業應報經に云く　日出でゝ須臾に沒し　月滿ち已りて後にかくる　尊榮高貴無常の逃かなる事是に過たり云々　心は尊きも卑しきも生れ來たるものは皆無常の悲みありて必ずべきこと　朝日の出でゝ程なく入日となり　月滿月となりて其まゝかくるよりも　人の死する事は早しと云ふ事なり　又日蓮上人の御書に云く

生者必滅の習ひなれば、たとひ永き命を得たりとも終に無常は免るべからず　まして今の世は百年の内外の事なれば　誠に夢の中の夢なり　非想天の八萬歳も猶たいもつの時にあふ　況や人間閻浮の習ひは露よりもあやうく芭蕉よりももろし　水に宿れる月の有るか無きかの身なり　草村にむく露のあとかさきかのためしなり　此道理を辨へ知らば後世を一大事にすべしと云

と遊ばしたり　是し不斷多ねんの臨終の事なり　誠に〳〵賴母しき哉　一期の臨終と思ひつめて常恒不斷に心がけ臨終の題目を唱へなば　たとひ臨終の時は惡緣にあふてうれ〳〵の作法儀式なくとも　常恒の臨終の功德にて必ず佛になるべしと云ふ事を二位成佛とは申すなり　又御書に

抑々上は悲想の雲の上、下は那落の底までも　生を受けて死を免るゝものやはある　外典のいやしき敎にも　朝には紅顏ありて世路に誇るとも夕には白骨となりて郊原に朽ちぬと云へり　雲の上に交りて玉のひんづら鮮かに雪の袂を驚せども　其樂みを思へば夢の中の夢なり　山の麓逢がもとは終の接なり　玉敷錦帳も後世の道には何かせん　小野小町衣通姫が花の姿も無常の風にちり　焚嗔張良が武勇に逢せしも獄卒の杖を悲しむ

と遊ばし給ふなり　古歌に

みな人の知り顏にして知らぬ哉
かならず死ぬる習ひなりとは
誠に心ある歌なり　大方高きも卑きも死ぬ

とよめり

る事を知らぬものはなく　知りたれども又知らぬなり　其故は必ず死する身と知りながら後世を願はぬ事　是は知り顏にして知らぬなり　必らず死ぬると知らならば　後世を大事に願ふべしと云へる心なり必らず死ぬると云ふ處に心つけよとの事なり　祖師大聖人も必ず死ぬる理を知らば後世を願ふべしと敎へ給ふなり　此等は皆不斷多ねんの臨終を心にかけて願へとの御示しなり　不斷の臨終がまことの時の臨終の功德になり

て　無始已來の煩惱の薪が臨終正念の題目の智火に燒つきて　無上の覺王となり　生死長夜の夜もあけて成佛菩提の曉にあひ　寂光淨土の主となり給はんこと疑なきものなり

史傳

日蓮大聖人（第十六回）

佛城關田養叔講演

多年の間、いろ〳〵と心を痛め身を苦め、京、鎌倉、比叡南部高野等に遊學をいたしましたる蓮長師、一代の佛敎の中に於て、何れの經が勝れて居るか何の經が劣つて居るか、又敎理の淺い深い、修行の易い難い、如何なる時に於て如何いふ敎法を弘めたらよい乎といふ樣なことは、悉く胸の中に浮び、夫れから、備ぶさに當時の人情風俗を探り世の中の大勢といふ者を明かに察して、窃に時機を窺つて居つた、

今や萬感交も胸に集まれる蓮長師は、閑寂なる清澄山の一室に閉ぢ籠もり、湛然として法華三昧に入り、立ち登る線香の香り床しき理に氣を練り心を養ふこと一七日の間……「あゝ……大聖世尊の御隱れ遊ばしてより年を經ること倍々遠くして、佛法は次第に其の本義を失ひ、三類の强敵は到る處に横行し、國の政道亂れ世の中は益々澆濁き狀態と成り果て一切衆生は悉く五濁亂漫の闇黑世界に迷つて居る……愚圖〳〵した行り方や尋常な手段では、到底之を救濟ふことは出來ない……いてや我れ是れより、佛陀の金言を楯と爲し柔和忍辱の鎧を着け、勇猛精進の劔を提げ、身命を三寶國土に奉りて、惡口罵詈杖木瓦石の戰場に突き入らん……」と、燃ゆるが如き熱誠と、鐵石よりも堅き大決心と、溢るゝばかりの大慈悲の心とを以て、安祥悠々と三昧より起ち出でまして御座います、時に佛　後二千二百一年——蓮長師御齡三十二才——建長五年四月二十八日の明方時、薄紅を澁いたやうな雲は峯の梢を彩り、櫻の花の咲き亂れたるかと疑はるゝばかりの頃、萬年かわらぬ大日輪王が、海の底より限りなき紅の光りを送りつゝ次第〳〵に昇る東天に向ひ、一輪の念珠を爪操り、兩掌を合せ、聲も朗かに

南無妙法蓮華經

と唱ふること十遍ばかり……これ實に日蓮聖祖が『夫れ妙法蓮華經宗とて久遠實成三身相即の釋迦大牟尼世尊と申す常寂光靈山淨土の唯一敎主の立て給ふ所なり』と仰せられた所の、眞の佛法たる法華宗が、この大日本國に生れ出でたる

初聲であります、實にこの南無妙法蓮華經の七字こそ『佛は末法の時の爲めに……上ィ等の地涌千界の大菩薩を召し出して、釋迦の肝心、妙法蓮華經の五字を以て、閻浮の衆生に授け與へしむるなり』と御妙判にある如く、御釋迦樣が本化の御弟子たる上行菩薩に御附屬なされたもので、即ち日蓮大聖人は、上行の御再誕として世に御出現遊ばされ、こゝに始めて此の御題目を唱へられたものである。『日蓮は、末法の世に出現せらるべき上行菩薩にも似たり……日本國の中に但一人南無妙法蓮華經と唱へたり、これ須彌山の始めの一塵、大海の一滴なり……佛滅後二千二百餘年が間、誰人も唱へず日蓮一人聲も惜まず唱ふるなり……日蓮が慈悲廣大ならば、南無妙法蓮華經は、末法萬年の外未來までも弘まるべし』と仰せられてある如く、大聖人は、佛陀の御使として、世界の人類を救ふべき大傳道師として、獨り此の南無妙法蓮華經を唱へた、眞に唱へた……一代の間、四箇度の大難、無量の小難の群り來る中にも、屈せず撓まず唱へた……閻王大臣の前にも恐れず憚らず唱へた、謂ゆる『日蓮一人聲も惜まず唱ふるなり』とは、聖祖一代の事業を一言にして說き盡くしたものと言ふべきである、

凡う日の出の光景ほど勇ましくも亦愉快なものは有りませんが、月もなく星の光りも消ゑはて丶、次第々々に昇る旭日に天空も海も悉く紅の光りに滿された處に、絶代の大豪傑が、これと相ひ對して立つて居りまする光景は、亦どうも筆にも口にも想像にも盡すことは出來ません、

此の御題目を唱へた處は、今でも淸澄山に遺つて居つて、之を朝日が森と唱へて居ります、

本號の講演は甚だ短いが、これは次號の都合に依つて致したので、次號には蓮長師が宗旨建立の大說敎、鷲衆一同の大に怒る所、及び、淸澄山を逃れ出るところ等を御話しする積りであります、

同　藻

龍口夜半嵐

作者　古定不新

其一　北條舘長局の場

矣竹「何と青葉樣、今日の御評定の樣子を御聞なされましたかへ　青葉「さア詳しい事は聞きませぬが、どうやら日蓮御房を今夜斬るとのことぢやげな　矣竹「そうしてまア、何處で御處置なさるのやら　紅塵「あの矣竹樣の氣迂いことわいの、七里が濱の片ほとり名も恐ろしき龍の口ぢやといな　紅塵「そんならいよいよ日蓮御房は、今夜斬らるゝのかいな　矣竹「謀叛

人よ、惡僧よと、鎌倉中の取沙汰ゆへ、所詮斯うとは思ふたれど　紅塵「假りにも法師を斬るといふは、近頃あまりきかぬこと　青葉「しかし故入道殿を地獄に落たといわれたげな、夫故後室樣の御怒りはげしく、それにまた初瀨の局が惡意地より御側にありて惡口雜言　數島「其初瀨の局ゆへ、御臺所の御氣色を損ふた白露樣はどうしてやら、日頃日蓮御房を信心ゆへ今日の樣子を聞くならば、嘸案じなさらふわいな　矣竹「眞にそれ〳〵、白露樣は日蓮御房の御弟子の日朗樣とは許嫁であつたぢやげな、それでもう御所にあつても、朝から晩まで、日蓮御房の事ばッかり　紅塵「然し器量なら、容色なら、鎌倉御所に並びなき、花の盛りの身をもつて、若殿原の引手を拂い、佛いぢりも何とやら　青葉「抹香くさき白露樣が御前の御覺めでたきも、奥でどうやら不思議の一つ　數島「ほゝ、紅塵「おほゝ、おほゝ、

此時下手の唐紙をあけて初瀨の局出づ、

初瀨の局「何をざわざわ騷くのぢや、よしない人の噂をいふて何面白ふて笑ふのぢや、日も落ちかゝるに夜の調度を、早うせぬかいのう、早う、早う　四人「はゝア、

皆々下手へ入る

初瀨の局「日も落かゝる今頃を、あの賴綱は何して了や、日蓮を斬る討手の人數、用意はまだか、ハテ、案じられることではある、

下手唐紙をあけて賴綱出づ

賴綱「姉上此處に在せしか　初瀨の局「オ、、まちかねし左衛門の尉、討手の人數は揃ひしか　賴綱「さん候ふ、先刻仰をうくると其まゝ、諸方へ下知を傳へし處、集る郎等三百人、用意最早調ひて候ふ　初瀨の局「それは太儀であつたのう、さるにても惡クキは日蓮、故入道殿を死後に辱しむるのみならず、剩さへ天下の御政道を蔑みする惡僧　賴綱「さては一味をかり催し、やがては謀叛も起さんず企圖　初瀨の局「うれかあらぬか近頃頻りに鎌倉武士を打語らひ、聞法談義に事よせて、極葉が谷に集るは　賴綱「四條南條を始めとし、波木井富木の大名なんぞ、宗徒の面々打語らい、すはといはば打て出でんず危き形勢　初瀨の局「世は太平を粧へども、蒙古の使の怪しさに、人の心も穩かならず、唯何となく騷しきに、天下に氏なき痩法師が、他國侵迫の難なんぞゝ、世をも人をも誑かし賴綱「うれのみ今の憂事かは、承久の合戰にもろくも敗れし京都の公家原、よしなき恨を今に抱き、身に一矢も帶せずして、やゝともすれば調伏沙汰、私かに關東の亂をまつとさく　初瀨の局「旁日蓮の斬罪は天下の爲と覺へたれ、斯くいふ内も時刻移る、賴綱早う御向へ候へ　賴綱「かしこまッて候ふ、

ト賴綱　幕へ入る　初瀨上手へ入る　此時白露下手より急いで出づ

白露「西の御局より火急の御用、御臺所の御氣色が和らいでか、何にせよ早ういてこうわいのう、

ト上手へ行うとする、此時下手より侍女井筒出づ、

井筒「もし白露様、ちと御待なされませいな　白露「ういやるは井筒様、妾は急ぎの御用ゆへ御免なされて下さりませ、

白露「然様に御急きなさらずともよいわいな、マア、ちッと話したい事がある、ソレあの御房な　白露「あの御房とは　井筒「日朗御房の事ぢやわいのう　白露「日朗御房がどうゞなされましたかや　井筒「サアうの日朗御房が今日の御評定にて土の牢へ推籠らるゝとのこと　白露「ヱ、ソリヤ井筒様、實かいなア、

井筒「實どころかいな、うれに師の日蓮御房も今夜龍の口で頸斬らるゝといなア　白露「ヱ、ヱ、ヱー　井筒「サ、うの驚きは御道理ながら、謀叛人よ惡僧よと、鎌倉中の取沙汰ゆへ、所詮のがれぬ師弟の罪、よし日朗御房が吉祥摩の時分に御前と許嫁であつたにせよ、法師となれば三界に家はない、まして女犯の罪招こうや、果敢なき戀にやつるゝより思ひきったがよいわいな　白露「何の井筒様、思ひキッたは後の月、心くもらぬ今日此頃、父上からきけばいよいよみじき日蓮御房の御敎へ、吾は日本の柱ぞとよりより御言葉あるとさく、其御房を無慘無慘頸切るとは何事ぞいのう、よし御房を嫌へばとて、法華經をうしる事やある、袋穢れたりとて、黄金をすてゝよいものか　井筒「流石は波木井殿の息女ほどの事あッて天晴れ健氣な志しとはいへ今宵に迫る御房の大難、御救い申す所存はないか　白露「さア先程より妾もそれを思ふてぢや、戀ゆへ心は亂れねど、世にありがたき上人の、今の憂瀬を見るにつけ、思ひはいとど亂れがち　井筒「亂れうめにし世の様を矯めて正さむ事はせで、法師を斬るとは詮ない事、それも初瀬兄弟の淺き心の響どさく、　白露「さア其初瀬の局ゆへ御臺所の御氣色を損ねた此白露、いまだ御不興とけぬ不仕合、井筒様御察しなされて下さりませ　井筒「ほんにまアあの初瀬様の惡意地といふたら、またとないわいな　白露「オゝそうぢや　井筒「白露様、血相かへて何處へゆかれまする　白露「たゞ此上は吾君の御前へいでゝ日蓮御房の御命乞を願ふより外はない、とはいへ西の御局より御用とあれば　井筒「御局へは妾が往くほどに、此處構はずとちッとも早う　白露「そんなら井筒様　井筒「白露様　白露「どれ急ごうわいなア、

ト此見へ宜敷、道具廻る、

其二　時宗寢殿の場

白露「日蓮御房の御命を助けん爲、御寢所間近く來たなれど御寢し遊ばす吾君を、驚し奉るは恐れあり、ハテ、どうしたらよからふなア　初瀬の局「誰ぢや、それへ往くのは誰ぢや　白露「はい妾で御座りまする　初瀬の局「聲はどうやら白露そうな、何用あッて御寢所へは、ハテ大膽な待女ではあるわいのう、御臺所のみ氣色を損ひしも氣にとめず、かく夜深きに忍びやるは、さてはいよいよ戀ぢやのう　白露「これはまた初瀬様の無體の邪推　初瀬の局「いや戀ぢや戀ぢや、戀ゆへならで何の今頃、あたりを憚るそよとの歩み、かねて御前の御寵愛あるとさゝしかど、かく色草の茂るまでとは思はぬに、かくては奥の噂も必定、御臺所の御氣色を損ねたも無理からぬことぢや

わいのう　白露「あられもない初瀬様の御疑い、不肖な妾なれど、御前の御寵愛を蒙るは、なめたる色の道ならず、父波木井實長が日蓮御房の御敎を受るものから、自然と覺へし御房が御敎へ、此頃鎌倉中の評れでは、謀叛人よ惡僧よと人の噂は烈しけれど、御政道正しき我君が、何條御信じあるべさや、夜半の御書見の御際に、白露、どうぢや、日蓮の敎の筋はどうぢや、つゝます語れとの仰せ、それ何ゆへとは判じかねれど、恐る恐る言上すれば、更るも知らず御聞きある、我君様の深き御心、かゝる事一度は二度、二度は三度と重なるにつれ、淺き心にくみかねて、それよかれよと奥の噂、御臺所の御氣色も、畢竟それ故かわりたりとさゝしかど、曇りなき身は晴れゆく道理、月日の經つを松の間に、今宵日蓮御房の頸切るとの御評議決したるよしをきゝ、あたら稀代の名僧を亡ひまつることのいとれしさに、御命乞を願ふため御寢所へ參ッて御座りまする　初瀬の局「さても工んだ其許が言ひ分け、聞耳もたぬ、下リヤ、下リヤ、ヱ、キリキリと下り居ぬらか、

白露「たとへ何の様に仰ッしやッても、御命乞の叶ふまでは、やわか此場を下らうや　初瀬の局「ヱ、まだうぢ〳〵とほざき居るか、例へ其申開きが眞實にもせよ、既に罪決まッたる天下の罪人を、女一人のかぼそき腕にとせんかくせんなんぞ、は思いもよらず、下リヤ下リヤ　時宗「やれ騷しゝ、靜まれ、靜せれ　白露「やゝあの御聲は　初瀬の局「我君様　時宗「先刻より兩人の爭い夜半寢覺の枕にひゞき、一つ二つはきゝとりしが、白露の願いとは何事ぢや、はや申せ　白露「こはありがたき御仰せ　白露「今宵の御願いは日蓮御房の御命乞に御座りまする　時宗「今日の評定にて既に頸斬ると決めたる日蓮を亦赦免すると申せば世の人口も何とやら　白露「さはいへ我は日本の柱なりと、身を以て國の重きに任じ給ふ日蓮御房の頸をきるとは、正しかれとの御政道の旨に添ふべくや、あはれ佛の御使と名乘り日本の柱と名乘り給ふ日蓮御房の御命、まげて御助け下さりませ　初瀬の局「何をのめのめいやるぞいのう、一且罪人と決まッた日蓮を何ゆへあッて、御許しあらふや、いやなに、我君様へ申しあげまする、白露の願事なんぞを御許しあらば、御政道の亂と存じまする　白露「國に正法弘るときは三乘の強敵起るとさく、今まのあたりその強敵、日頃申し上ませし法華經の意はこゝに御座りまする、あはれ御賢慮をめくらされたう存じまする　初瀬の局「まだなま若き身を以て、佛いぢりも凄じい、正法邪法の空覺で、我君の總明をくらます所存か、其處キリキリと立ちませい　白露「いゝや立たぬ、立たぬ、立ちませぬ　初瀬の局「スリヤ、どうあッても立たぬとな、立たねばこうして　紅葉の前「初瀬待ちや　初瀬の局「やゝ貴女は　白露「紅葉の前様　紅葉の前「兩人ともに靜まりませい、自らは我君へ願事あり――、我君様へ一の御願い　時宗「何事ぢや　紅葉の前「日蓮御房の御命乞に御座りまする　白露「スリヤ、あの御臺様が　紅葉の前「おいのう、白露、其方よう、御命乞をしてたもつたのう、法師を斬るは善らぬことゝ我君様へも日頃申せしなれ

ど、今日の御評定にてそれと決まりし殘念さ、平生ならばかくてもあらんが、只今將軍家御息所の御產の事近附玉へば、諸寺諸山へ仰せて、御祈もあるべき時、法師を斬るは餘りの非道、まげて御命御助け下さりませ　初　の局「アノ御臺樣にも白露と同じやうに　紅葉の前「さ、其白露にかゝつた疑もとけたわいのう、先刻御次にあッてきけば、我君御政道の御賣けに白露より日蓮御房の御敎をおきゝなされしとや、それを跡方もなき事にとりかへていひふらし、妾が嫉妬を起せしは、皆是女子の淺き心、白露、堪忍してたもいのう　白露「ありがたき其み言葉、御疑いはれし其上に、日蓮御房の御命乞、つきせぬ喜びに御座りまする　時宗「國を思ひ時を思ふ日蓮が、志し、おながち憎ッくしとは思はねど、世を咀ふとの世上の噂、其ゆへ斬罪と決せしが、またふりかつつて考ふれば、それ程までの惡僧ならず、國の大難時の不祥を强て救はむ彼が心、我若人の言葉にきゝ、今宵彼を斬り捨てなば國と時とを如何せむ、北條の家は榮ふるとも國破れなば何とすべき、旁御息所御產の御祈の事もあり、日蓮の斬罪は赦免致すア　白露「スリヤ日蓮御房の御命は助かりしか、チエ、ありがたや、かたじけなや　初瀨の局「こは我君の物に狂はせ給ふか、かくては御母君の御怒りの程も案じられまする　時宗「母公の怒りは一家の私事、國を治むると一家の私事と、何れが重き何れが輕き　初　の局「ハ、ア　時宗「信濃判官をはや呼べ　白露「判官殿、入道殿、召しまする　信濃入道「あはただしき御召、異變ばし候ふや　紅葉の前「日蓮御房の命を助けよとの嚴命なり、入道いそぎ御敎書をかきアいのう　入道「スリヤ日蓮御房は御赦免とな――　かしこまつて御座る　時宗「ヤア誰かある龍の口まで馬を立てよ　波木井十郎實重「其御使某に仰せつけ下されたし、時宗「其方は波木井十郎實重　白露「や、兄上樣　實重「今宵御所に宿直せしに日蓮御房の御處置あるとき、、あはれ不愍と思ひしが、御臺所の御命乞、つゝひて妹白露が切なる御願御きゝ下され、命助けよとの嚴命、あまりの事のうれしさに、進んで御使を承たまはり度御座りまする　時宗「ウム健氣なり十郎實重、然らば汝に使者を申付る、いそげ　實重「ハ、ア　白露「兄上隨分御急ぎあれ　紅葉の前「時刻移らは詮なさア　實重「ハ、ア、

此時御殿鳴動す、皆々立つ

初瀨の局「あの物音は、實重「然らば御免ッ、

揚幕へ入る此見へ幕、

其三　返し龍の口の塲

大國屢つ夫、七里が濱の濱つゞき、龍の口といふ處に、時しも文永八年菊月の中の二日の夜とかや、鎌倉御所の下知として日蓮祖房を處置ある、天の怒りか地の嘲りか百雷一時になりはためき、雨風すさぶ有樣は、げに恐しくもまたすさまじけれ、

頼綱「いひ甲斐なき郎等かな猶豫せば時刻移る、はや日蓮の頸

を斬れッ、依智三郎「ハ、ア、かしこまつて候ふ、日蓮觀念ッ、四條金吾「あはれ只今にて候ふ、日蓮「いかに殿原是程の喜びを笑へかし、凡そ世の中に生あるものとして誰か死をまぬかれぬべき、雉となつては鷹に捕はれ、鼠となつては猫にとらはる、戰場に屍をさらし　妻子の爲に命を捨るもの多けれども いまだ法華經の御ゆへに、命ちを捨てし例を聞かず、みよみよ今我臭き頭を擲て、佛身を得んこと、瓦石を以て黃金に換ふるが如し、頼綱「ヤア罪人に物言すな、ソレ、三郎「ハ、ア、今ア觀念ッ、

此時天地震動して落雷す、皆々氣絕す、暫くありて何處ともなく音樂きこゆ、

日蓮「あら不思議やな、何處ともなく音樂のきこゆるは、

此時舞臺の軍兵皆々切穴へ落ち、日蓮上人は音樂の音につれて自然と天井へつり上る、此間に舞臺の書割は一變して寂光淨土となる、下手奥より無邊行菩薩、淨行菩薩、安立行菩薩、七寶の瓔珞を頂き柔軟和好菩薩の裝束にてせり上げとなる、亦日蓮上人は上行菩薩として下手の天井より是も菩薩の裝束にて樂の音につれて天降る、

無邊行菩薩「あらめづらしや上行菩薩、靈山淨土を出でさせ給ふてより、月日積りて三千年、淨行菩薩「惡國惡王の世に出でゝ、惡臣惡民を救はんと、慈悲の心はしばしもやまず、安立行菩薩「末法萬年の時を撰び、娑婆世界に人間と生れ、世尊の勅を奉行ある、其名も今は日蓮上人、三人一同「今宵はげしき此大難御身おさおさ危ふ候ふ、上行菩薩「濁世の難のはげしきに、諸佛諸天の加護も衰ろへしか、今宵娑婆世界にては吾を斬罪に行ふたり、さはあれ不思議や天地ふるひ、雨風すさぶ有樣に、軍兵は何地行きけむ妻も見へず、これ ぞ ささしく御付屬うけし御經のいみじさによると覺へたれ、無邊行「さてあらんとはかねて知る、かゝるいみじき事ありし娑婆世界の中には日本國、淨行「日本國の中には相模國、安立行「相模の國の中には片瀨、無邊行「片瀨の中には龍の口、淨行「上行菩薩が命をとめ置く處なれば、安立行「寂光淨土と謂ッべく候ふ、上行菩薩「してまた娑婆世界の日蓮は、今月今宵頸刎られ了ぬれど久遠の壽命はいかでつくべき、久遠內證の壽命をもつて、再び日蓮と世に生れ、惡業の因緣を以ていまだ三寶の御名をきかざる、諸の衆生を救ひなむ、此由世尊に奏させ給へ、さらば、三人「さらば、四人一同「さらば

上行菩薩音樂の音につれて天井へ上る、三人菩薩は下手奥の切穴へ下る、舞臺の書割一變して元の龍の口の塲となり、處々軍兵打臥す、日蓮上人音樂の音につれて天井より下る、恍然として眠る模樣、此時松の雫軍兵にかゝり、皆氣附く、頼綱も氣附く、

日蓮「ハテ不思議やな、夢ともなく現ともなく、菩薩の來向、

尚言はんとする時、向ふバタバタにて實重來る、十郎「平左衛門尉頼綱は御在さぬか、日蓮御房を赦免の御教書參つて候ふ、頼綱「オ、十郎實重、實重「師の御房　金吾殿とこれに在せしか、金吾「何御赦免となハ、ア、頼綱「エッ殘念至極、軍兵「立ちませい、

此見へ皆々よろしくこなしあり、幕、

（完）

次號豫告

新曲　傾城曹賢　不新作

紹介

慶長十三年淨土日蓮の宗論について（承前）

文學士　辻善之助

本論

事の發端

ころは慶長十三年、秋初つかた、處は尾張熱田の新本遠寺に法華宗の僧常樂院日經といつるものが說法を致しまして、所謂折伏をして居りました、處が、同じ熱田に淨土宗の正覺寺といふがありまして、うこの僧俗どもが、之を聞きまして大に憎み怨んで、罵詈を加へ苦しきは法座へ石瓦を抛ち、又杖等を以て參詣のものを支へる等の事がありましたので、日經は二十三ヶ條の質問をかきまして公開狀を送り、論戰を求めました處が、正覺寺方では、之に應せず、また少し熱田より隔りました處に、知多郡緒川村といふ處で、日經が說法をして居りますと、同村の善導寺のものが日經の折伏の說法を聽て、大に怨み嫉んで、法座の前に來り惡口罵詈するが故に、日經は高座の上から淨土の所依の三部經を出して、難問を出して、之に答へよといひました、處が、淨土宗からうの返答の狀をよこしましたけれども、少しもうの難問に答へることはせずして、例の惡口雜言ばかりあるので、重ねて難狀を送り、これより數回双方の間に問答の書をやりとり致しました、『淨土日蓮宗論記』には『確執豐三箇年』とあり、双方の爭は隨分ながく結び解けなかつた事とみます、結局徒に双方の間に爭て居るよりは、公儀に訴へて裁決を請ふには若かじといふものあつて、正覺寺の澤道より濟須の性高院玄道に送り、玄道より江戸增上寺の源譽にこの事を告げて、廿三條を示し、終に之を駿府の家康の所へ訴へるといふことになりました、

日經の略歷

さてこの日經はいかなる人であるかと、うの履歷をきゝますに天文廿年に上總國二宮領南谷木一松といふ處に生れました時、松本法亂のあつた天文五年を去ること十五年に當る、近頃妙滿寺の野口義譽氏の編した「不借日命日經上人」には、永祿三年二月廿八日誕生とありますが、今うの據を知りませぬ、日經は後に妙滿寺の二十七代にすわりまた東山上行寺、河原本正寺の開祖となりました、年廿三のとき奥州に下向して、磐城の山崎といふ處で、淨土宗の談義所に、三百人集會せる所で、宗論をとり結び、勝利を得、尋で宇都宮に參りまして、天台の三個寺と譯論往復、火花を散し、やがて勝利を得て、松本法亂已來斷絶したる法華の談義を此に復興して、うれから

下野常陸奥州境まで弘敎したといふ事です、元來頗る辯舌に長けて居た人でありまして、「慶長見聞錄案紙」にも「此僧廣く學解はなけれ共、生得辯舌明にして口に任せ諸宗誹り候へども、人指して不搆」とある、『繋珠錄』といふのに、一の面白い話を載せてあります、其話は日經があるとき有馬の温泉に浴して居たるに　ある禪家の僧、門弟に圍繞せられて同じく温泉に居りました、時に中秋の初めで半輪の月影が泉面に浮んで居た、彼の長老は從容として曰く、天月猶浴す況や人間待つある身をやと、日經傍に在つていふのに吁嗟哉片輪の月である故ではないかと、時にかの長老勃然としていふのに然らば滿月ならば如何といひました處が、日經呵々として滿月は即片輪と片輪の寄合であると答へたので、長老赧然としたといふ話がある。これによつても日經が機辯に富んで居た事の一斑を知る事ができやうと思ひまする、かういふ風の人であつた上に、其宗の特色として祖師日蓮以來の風をうけて頗る議論に富み、すべてのやりかたが圭角多く、至る所議論を闘はして居りました、

内濟調停をはかるものあり日經きかず

さて淨土宗の力から家康へ訴へたので、いよ〳〵法論を開かうといふ前に當つて、双方の間に立つて内濟をはからうとしたものがありました、うれは學校寒松（禪珠）である、『慶長見聞書』に「法華宗日經あまりに愚人にて我まゝ計申不便とて、寒松あつかひ御詫申上候へども、中々不承引候」とある、このかき方はいかにも幕府方淨土方になり傾いて居るのですが愚人といひ、我まゝといひ、不便といふなどは、實際一方から見れば左樣に見へたかも知れないかとも思はれるのであります、即ち日經のやりかたといふものはまことに當時の時宜に適應せず、いへばあまり悋惻なる方ではない、また現在目の前に危難の迫つて居るのをもかまはずに居るなどは、實際不びんで憫然であるとも見へたでありましましやう今少しく當時の事情を考へて見ますに、日經が莞拆伏はいたく人心を激昇せしめて、好んで平地に波瀾を起する嫌があり、且つ其いひまへがいかにも當局者を侮蔑するに似て居ります、「慶長見聞錄案紙」にうの樣子をかいて、「はきものに彌陀の名號を彫付法華宗は諸佛をか樣に致すも不苦と申」とあります、又淨土宗から上へ訴へて宗論せうといひました處、「日經うれこそ内々望思ふ所なり、淨土宗に勝、上樣まで且那に致し度所存なりよしなき淨土宗御用ひ候事笑止に思ふ所なり、上樣法華宗に御成候へば天下安全御子孫御繁昌なるべし何とぞ申上宗論致し候へと」返答したといふ記事があります、これらのことばは、いかにも相手の怒をまねいてうれこうよしなき事に爭をわざと求めるものであつて、自らの主張を通す上にも甚だ不便であり、うの結果の如きも自から見にすいて居るのであります、また家康の方からみれば宗論を爲さしめてうまく之を閉口せしめればよろしいが、うの處置がまづければ頗る煩をのこすの恐あり、故に家康の性質としてまた爲政の局にあるものとして、考へて、なるべく之を平和に收めたいと考へたる違いない、故に出來る事ならば之が内濟をはかりたいと思つたに違いない、即學校寒松は當時の智者たり、且双方の間に立ちて公平なる地位にもある處から、之をして和談をはからしめたのであらう、寒松自分一個の考から内濟をはかつたのではなく、家康の考から出たのであることは別に證據はなくとも大抵想像して誤りなからうとおもふ、斯の如く寒松間に立ちて扱をいれやうとして、日經にすゝめて謝罪を出さしめやうとしたが、日經は頑としてきかない、『蓮成寺文證』に「去年於駿河卿立腹にてめしよせられ候みきり、がつかう御内證とて使を給候趣は、此度淨土宗への卅三ヶ條之法門かけ申候卒爾をいたし候と、上樣へ一筆ささげ被申候へわび事可進之由に候、某申分に我等遣候廿三ヶ條御らん候へ皆法華のばうもんと宗門のたてばにて候、うれをうつじとか

きあげ候へば法華經はうつじ經日蓮はうつと人になしそれがしは無間地獄へたち可申候此上はするがの辻にたちうづめにうめさせられあこきりにて百日百夜ひかれ候共わび事申まじきと使に申きり候へば五の卷の我不愛身命但惜無上道のきよもんにあたり申候、

こゝに至つてはその主張の強固なる、うの主義の堅實なる事は、まことに稱讃を値するものといふべきである、うこで宗内の有樣如何と顧みるに、「當代記」なぞにも「京都の法華宗内々不可然由被思けれども常樂院不用之」とあり、また「蓮成寺文書」にも「あまりしやくぶくを常樂院つよく申候間なかをたがい候とうら事を申上候」とあり、これは日經自から人に與へし手紙にあり、また『日經一期之横難』と稱する日經の手紙に次のやうなことがある、駿河に居たときに永仁即龜屋榮仁とて京都にありて幕府の呉服師たりしものにて最も家康の昵近たりし人、この人が京の廿一ヶ寺も三年以前から日經と不通である、また其後に身延、池上、眞間、中山其他關東の諸寺は常樂院と同心せぬ由の一札を家康に捧げた處、家康が「日本法華宗非同心彼一人計徒者とて彌御立腹被遊候」とあるかやうの有樣で、日經は實に孤獨の地位に立て居たのである

宗論前の情況

うこで日經はいよ〳〵宗論を致すことになつて、うの挑に應した、即宗論の諸式によつて檢使、經くり、判者、記錄者等を、式の如く立てられたいと申込みました、うのことばに「此度之間答末代迄のこり高麗南蠻迄も廣まり申すべき記錄たるべく候間、三國の法度のことくに被仰付可被下候」と申出でました、日經このときの意氣頗盛なものであつて後人に與へた手紙にも「淨土宗は十二三ヶ國出家は雲霞の如く集候吾は但一人なれども廿三ヶ條の法門、駿河にても彼宗迄答不成、愚僧は一騎當千の心地にて少もひるまず、心強かりける（中略）日本の諸宗諸人を合手になし我は但獨にて候」といつて居ります、このとき彼自からは心窃かに死を決して居た事が見へるのであります、それは「本光寺文書」に「於江戸宗論勝可申事うたがいなく候、雖然御所之御しうしに候間、いのちはあるまじく候、りやうせんとやうぞにて御めにかゝり可申候」といふ自筆の手紙があります、これは十月八日の日附で即宗論より一ヶ月餘前の事であります、宗論前に『校合雜記』（享保十一年ころの編）に兩宗對決の前にあたりて家康法華坊主を召して、明日いよ〳〵對決せしむべし若和會達たち勝たばゆゝしき手柄といひつべし、左すれば若し勝ちたるときには何をか望むと尋ねたるに、法華宗のものゝ答に淨土のものゝ首を刎ねて淨土門をたやさば重ねて諍論起らず公儀に御厄介をかけることもなしと答へました、家康よし〳〵と之を聞屈け、其次に淨土宗のものを召して同じく之を尋ねたるに、淨土の坊主のいふにはこれは皆自分〳〵の祖師を尊ぶより起りたることゝれば其儘にさしれかれたい、別に死刑を望むのぞうのといふことは申上げないと御請をした處が、家康機嫌うこれてかゞぞ懇に尋ぬるになせ心底を殘さずいはぬかと頻りに返答を迫つたので淨土のものが、さらば負けたものゝ三衣を脱かしめられるやうにと申上げたので、家康の機嫌か直りあとにて側のものに明日の對決はいつれがかつかあてゝ見よといひしに各々別に考なしといふ家康曰く明日は必淨土のものの勝つべし、うの故は日蓮のものゝ答に淨土宗の斷絶せんことを望みたるは邪欲より起りたる返答であつて、淨土のものゝ三衣を脱せしめんことを請ひたるは佛法の掟にして出家にはふさはしき願ひ、天下の政治に容喙せぬ處嘉すべき事である、されば日蓮は負くべしといふたといふ話がある、然るにこのことは安土問答のときにも同樣の話がありまして、「四度宗論記」に「信長公重而使矢部善七郎問淨曰双方得勝利者爭

奈何念曰可令彼等爲弟子成佛矣日蓮義答曰二會者刎首淨宗悉絶之矣信長公思念日蓮義者邪道法敵也念詞義殊勝矣」とある「校合雜記」は此話を本として且家康が宗派に公平なる考であつたことからわり出した話で作り事らしいのでありますが、とにかく家康の面目をあらはしたものというて宜しい、

（以下次號）

寄書

日蓮宗の迷信的崇拜物（承前）

高鍋玄洋

されと予は、宗教家として祈禱なるものを否認する樣な亂暴者でない、だゞ彼の所謂中山の祈禱法なるものは、斷して聖祖の祈禱でないと主張するのである、此の問題は、今の專門の塲でないから、いづれ近き將來に於て「聖祖理想の眞祈禱」なるものを書く考へであるから、うの際、詳を悉くして說破してやる、之を要するに、折角安心して十界の本尊中にて本有の尊形と成り玉ひし鬼子母神をば、後の弟子たちが勝手次第に本尊中より引きづり出して、別段に勸請する必要は斷して無ひ　うれとも之の鬼子母神を以て、產婆々の代用に使ッて賽錢が慾しいとか、木劔拍子木をカチ〳〵叩いて開張興業をやらかすと云ふのなら、最早、論外滅法の沙汰である

又稻荷崇拜として盛むなのは、誰しも承知の備中の最上である、近來亦た京濱間に頻りと流行り出した新顏の稻荷は池上本門寺の長榮である、今、前者は暫く措き、長榮の事に就いて少しく駁して置かう、本門寺から發行する長榮の緣起が誰れが作ッたか知らないがなか〳〵以て呆れ果てた文句がある、うの一節に、聖祖大士佐渡御在島中に此長榮稻荷が聖祖を守護したとある、何むと骨稽にも亦た不都合至極ではあるまいか、紫衣の高僧もコゝに至ッていよ〳〵毫釐したと見へる、彼れは如何体に開目抄を拜讀致したのか、まさか『開目抄に於て聖祖の發迹顯本を認めず』てふ狂氣坊主でもあるまいに、せめては聖祖は、世界史上に於ける大偉人だゝ云ふ位の事は認知仕ッて居るであろう、前にも略述した通り、在島の以後の聖祖は最早凡夫の日蓮でなくて、本化上行だと云ふ事が知れ切ッて居るではないか、さるを凡夫の日蓮としても世界の大偉人、大英勇なるもの、うれに何だ、野狐の長榮稻荷が、末法の大導師たる本化上行の大菩薩を守護したとは、能くもづう〳〵しひ事も書けの者である、殆むと嘖飯の大滑稽と云ふ者である、如何に金錢の菩提化は聖祖の御主張とは云へゞ本門寺維持金が不足だからとて、別に何とか事觀法門の應用もありうな者たのに、人も有う事か、本法所持の大菩薩、日本の柱、日本の眼目、日本の大船たる末法依師の本化聖祖を以て、ホックスの奴隸と成したのは、遂に宗門を亡ぼすべく派遣せられたる、惡魔の一使者としての腕前、まことに感服し過ぎて、讃辭の呈しやうに苦しむのである、れまけに、ぜん〳〵がち〳〵の大皷拍子木を叩き立てゝ、野狐の穴まで崇拜せしむに至ッたのは、言語同斷、咄々の大怪事では有るまいか、末法大導師が非滅の滅を示したまふた、コゝ、本化鶴林の靈塲も、あはれ惡魔の巢窟と化し去ッたのである

予は又た、コゝに大に怪訝に堪へさる大疑問がある、彼の天下の法誘を退治して、妙法の光明を滿天下に輝かざむとの大理想の下に發行する、池上〇〇新報社主〇〇だ、开は彼れが、俗に云ふ『れ穴さま』即長榮稻荷の穴の上に、有ろう事か有まい事か『長榮稻荷天』てふ金文字の入ッた大なる額を寄進して居る事である、まさか發狂して奉納したのでも有まいが

さてさて呆れ蛙の向ふ見ず的の亂暴にも亦た大誇法的行爲である彼等は何の爲めに○○新報まで發行しつゝあるのだ、新報上にて誇法退治の論文の一つも書くべしと思ひの外、却ッて身は誇法を皷吹し、迷信を助長しつゝあるは嗚呼是れ何たる不埒千萬なる仕打ぞや、予は曾てうの中檀林に遊むて居る時、うが宗賊的、犯逆的、誇法的行爲なる事を四方八面よりどし〳〵攻擊して呉れたのだ、昨年の八月暑中休暇の際池上に往ッて見た所が、づう〳〵しい哉、依然として取除けて居ない、之が普通一般の忘信者ならは敢て八釜敷折伏するの要もないとしも、人が人だ、職務が職務だ、誇法退治の新報記者を以て、自任せる堂々たる本門の一男子でないか、あはれむべし、宗門の大震塲として將た大偉人入滅の世界の大舊跡としての本門寺も彼等に依つて滅亡したも一般である、吁。

妙見崇拜、うの本店は石高き能勢の妙見山である、全國隨分と出張店を在る事やなか〳〵繁昌な者だ、うも妙見と云ふ神は北辰てふ一の星である、之を擬人的崇拜物、即ち人形的崇拜物に造り立てたので、別に何等高尚の意義を有せる神でなく、たゞ是れ一種の天然物崇拜に過きない、大坂なぞでは妙見と云ふと、日蓮宗の代名詞であるかの樣に云ひなされて居る、まことにれ氣の毒なのは妙見抔と何等關係もない、顯本法華宗抔も此部類に四捨五入せらるゝのみか、研究大會の生徒等か、玄題の聖旗を翻して路傍布教等に出掛けると、妙見樣の學校だなぞと評を放つ者もある、以て如何に妙見崇拜が盛むに行はれるかゞ、推知せらるゝであろう、否、大坂の日蓮宗より妙見なる者を除き去ったならは、あはれ何者をも無いのである、妙見中心の宗門である、この妙見が一種の善神としても、北辰てふ一星だから勿論天界の一部だ、即ち十界本尊中の天上界の部類だ、それを態々〳〵と御苦勞千萬にも天界から引づり出して、妙見だなぞと勝手氣儘な神に仕立てゝ、愚夫愚婦より金を取込むれ先捧とするに至ッたのは、まことに情けない金の亡者もあるものだ、否、宗旨を開きたまひし本化聖祖ですら、其名を知りたまはざるのみか、之を崇拜せろとの御教訓もないのに、さて又祖師を踏み附けにした犯逆的行爲を敢てなすに至ッては、いよ〳〵日宗徒の不靈亂暴には驚かざるを得ないのである、（次號完結）

雜報

日本橋倶樂部に於ける戰時特別佛教大演說會の模樣

去月十五日、淺草新福井町眞本法華宗弘通所の發企にて、日本橋濱町なる日本橋倶樂部に於て開會せられたる戰時特別佛教演說會の模樣を報せんに、開會は時節柄特に世人の注意を呼び、特に弘通所としては同倶樂部に於ては今回が始めての開會なれば、新方面の人々の來聽多く、出征軍人及び出征軍人の家族に御本尊を授與せられたる由なるが、是も非常の歡喜を以て迎へられ、尤も滿足なる結果を收めたるよし、當日は本多上人及び小林上人も出席せられたるよし、今其演題及び演者の名を左に報道すべし、

一正法を護持せよ　増田松治君
一戰爭に就て所感　山口親太郎君
一正義發展　石川倉吉君
一本尊の由來　中野鶴藏君
一戰時必要　小島儀次郎君
一教世の本誓力　高島音吉君

右六氏の熱心なる演說なしたる後、

一日蓮上人の死生觀　田邊善知師
一軍人と宗教　本多日生師
一本尊の本尊　小林日平師

三氏の演說より聽衆皆熱心に傾聽し、日沒頃散會せしといふ

林日法氏の書翰、作州津山の後信者林日法氏は、此程大學林教授原田容廣氏にあてゝ一封の書翰を寄せ來りたるが、言

言句句、護法愛國の至誠よりいで、殊に日本の國神を論ずるに顯本的の眼光を以てしたるが如き尤もよし、機を見て此書を公開する時あるべし、

●本多日生師の講演、大崎の日蓮宗大學林は去月十八日本多日生師を聘し一場の講演を乞はれ、同師年來研鑽の本尊論に就て一時間餘の講演をせられたりといふ、當日は日蓮宗大學林長小林日董師も臨席ありたる由

●從軍布教師、日蓮宗の從軍布教師たる守本文靜師は六月一日第○軍兵站官司令部付として既に渡海せられ、亦脇田堯惇師は第○軍付として、水戸の松森氏は騎兵旅團長○○○閣下の部隊付として共に從軍布教師となり出發せらるゝといふ、

夏期講習會の開設

和氣同信會支部が屢々活動して岡山と相並びて双々の光明を放ちつゝある事は吾人の尤も多しとする處なるが今回同支部の吉田完亮氏等相謀つて同地小學校内に夏期講習會を開設し東京より本多小林の兩師を招待し本尊論成佛論の講話あるよし會員は男女を問はず誰人にも入會出來るよしにて會費は貳圓壹圓、五十錢の三等に分ちたりといふ、本年は時局の爲に各地の夏期講習會は多く中止會に到らず、大日本佛教青年會の如き年々地方に開會し來りたるも、本年は東京に開會し會員を百名と限りやゝ縮少に打傾きたるさへあるに、關西の一地方に於て特に講習會の開會を見るは、誠に結構の事といふべく、以て和氣岡山地方の道を求むるに如何に熱心なるかを見るべし、

東京だより

何處も同じ事に候ふべきか、東京の此頃は尤も暑く候ふ、うちして分けて暑きは戰の模樣を成るべく早く知らせんとて賣りあるく新聞の號外賣の聲をきく時に候ふ、

東京の宗教界は五月十六日宗教家大會にて已後餘り何事も無之樣子に候、

湯島の麟祥院にてと覺へ候ふか、先達辯護士丸山長渡氏等の發起にて有名なる志士沖禎介氏の追吊會營まれ申候ふ、當日は在野の名士大分參列せられ候ふ樣子に見受候ふ、

先達常陸丸等の遭難にてあはれ海底に沈みたる人々の忠魂を吊ふため、其筋にては一大追吊會を營まるゝやにて多分築地本願寺にてなるべしといふ、

何も序での事に候へば、雜司が谷の模樣も一つ二つ御しらせ申すべく候ふ、

先づ第一に異樣に覺へ候は雜司が谷附近な非常に學校の多き處に候ふ、音羽護國寺には眞言宗豐山派の大學林あり、亦有名なる目白の女子大學及び早稻田大學もすぐ近くに有之候ふ、亦巢鴨には眞宗の佛教大學あり、少し遠くへ行けば哲學館大學あり、亦池袋停車塲より瀧車に乘れば大崎の日蓮宗大學林も餘り遠からず候ふ、

繰返して申候ふ雜司が谷附近は尤も學校の多き處に候ふ、

先達中、高等宗學院に於て、本多日生上人は本尊論を、小林日至上人は金錍論を、常在して講せられ、亦坂本日垣上人錦織日航上人は相前後して御來錫相或、坂本上人は誦誦抄を錦織上人は十法界抄を講せられ、山岬日曇上人は駒込の閑居より起つて毎日御來錫相成、自我偈を講せられ、いづれも滿講と相成候ふ、

この五上人の中、本多上人を除くの外は皆御老体にましますにも係らず、其講義、熱心にして活氣あるは生徒一同の喜びに堪へざる處に候ふ、想ふに此等の四上人は其餘命の幾許ならざるを自ら思ひ、其平生蘊蓄の學說を特に末代萬年に傳へんとて、かく熱心に生徒の心田に注かれ候ふものと存じ生徒も其心して講義をきゝたるもの多く候ふ、四老上人が受持たれ候科目は將來何人に逢ふても聞く事は易々たるものなれど、其金錍論たり自我偈たり誦誦抄たり十法界抄たる科目に就て、錦織上人は錦織上人の見識あり、坂本上人は坂本上人の見識あり山岬上人は山岬上人の見識あり、小林上人は小林上人の見識あり此見識は各科目の通論に附隨する別論に有之候ふ、而して此別論たる見識こそ尤も價値あるものにして、此價値ある見識か四上人にして最早此世に在さぬ時は聞く事

が出來ぬと思へば、今四上人が世に在す間に一時も早く馳て此別論をきくが學問に志すものゝとるべき途に候ふ、而して今度此見識をきく事を得たるはつきせぬ喜びに候ふ、

大學林の方は木村教授原田教授等熱心に教鞭をとられ成蹟良好なるよしに候ふ、

本多上人の本尊論は、日重日輝日達日受の本尊論の批評より進んで本論に入り、上人獨得の新見地よりの鋭利なる批評は往々魔心愚心を打拂はれ申候ふ、上人の本尊論結論はまだまだ遠くして而して前途に一大光明の輝きつゝあるは確にて候ふ、

四邊の風光すがすがしく誠に宗教者に哲學者に詩人にうして學生にうれしき處にて候ふ、早々、

●京都通信　五六兩月の教界は別に變りたること無く候本山部長野口師は五月の例會演說より盡忠報國の爲めに法華經講義を開始し月々參聽者多かりしは爲國爲法華幸甚と可云

我山内に於ける五月十八十九兩日演說は午後七時半開會「佛祖に不幸のものは誰ゾ」鈴木孝碩「戰爭と折伏」内藤智厚「佛本行經を讀む」野口義禪十九日「三調和」加藤惠「愛國」白井日熙「法華經講義」野口義禪等の諸氏にして十時閉會

○六月五日夜成就院且津崎方に於て精靈逮夜を幸に演說會を開かれたり本山より白井師銀井師小生出席參聽者異教徒多かりしも熱心に聽聞ありたり

○六月十三日本山妙滿寺に於て第三回六百五十二年紀念大演說會開會演題辨士左の如し…「世界の日蓮」白井師「未定」昇堂師「日本魂を敎ふるは日宗の特色」驥尾日守師「日蓮上人の御筆蹟」野口師にして各敎師は有益なる演說聽衆一同に滿足をあたゑ此の夜仲々の盛會なりき

六月拾八十九日列會演說辨士松尾氏鈴木氏野口氏十九日銀井氏野口氏等の諸氏出演此の夜兩天の爲め參聽者少なかりき

●岡山だより　我篤信會に於ては去る六月廿一日午後七時山崎町本行寺に於て大演說會を開催したるが參聽者二百餘名にして非常の盛會を極めたり、殊に此度は作州吉ヶ原の高田日暢師の來岡出演ありしことゝて一段の花を添へたり今其演題と辨士をと左に掲ぐ

開會の辭　幹事　松崎事成　高田日暢　能仁事一

進理的敎心
釋迦牟尼と開戰論
自己を忘れたる信仰は罪惡也

各辨士は獨特の雄辯を振はれ、聽者をして感動せしめ、拍手聲理に閉會を告げたり、時正に十二時なりき。

六月廿三日午後八時より、旭町集會場に於て、演說會を開會したりしが頃は正に農家田植時なりしを以て、來會者少なかりしは遺憾なりしも熱心なる人々會するもの四十餘名、其演題と辨士は

開會の趣旨　橋本某
所感　森田秋譯
本尊論　松崎事成
迷信の利害　高田日暢
曼陀羅の解　能仁事一

閉會を告げしは十一時頃なりき

六月廿四日は、花畑、魚春樓（本宗熱心の檀家）に於て大演說會開會、當夜は不幸にも大雨の爲め、來會者少なかりしも常に我敎風を慕へる人々六十餘名來聽し、殊に其大半を學生の占めたるは實に喜ばしきことなりし、此演題と辨士は左の如し、

開會の辭　會
靈魂不滅論　松崎事成
菩提的宗敎　高田日暢
不誘三寶成　能仁事一

閉會したりしは十一時過ぎなりき。（篤信會員横山鐵太郎投）

●宗敎と軍人との往復書　今成乾隨氏は頃日其知友海軍少佐大瀧道助氏に對して左の書簡を送られたる處同少佐直ちに返信來りたりとて示されたるもの左の如し

予は貴君と共に東堤學校に學び候時貴君は溫厚篤實の少年なりしを記憶致し候貴君が壯年に及び日本は海國なるを自覺せられ海軍に籍を投せられ候とは貴君の母君より承り勇

壯快活なる御ことゝ敬服仕候今回日露戰爭につき貴君は如何なる方面に活躍せらるゝやと懸念仕候處果然第三回閉塞運動の際第十艇隊司令として御盡力遊され候趣き欣喜踊躍の至に絶へす候是れ畢竟御兩親樣か忠君愛國の充實せられ居候感化と貴君か先天的軍人志望と相俟て此の一大壯擧を遂行せらるゝ幸運に會せられ候と信し申候定めし御兩親樣も御滿足の御事と推察能在候貴君今回の擧は忠孝兩全の御敕語を身讀せられたると喜悅仕候小生も御承知の如く佛敕に入り候處幸ひ眞佛の慈悲に浴し妙法の光明に照され聊か立正安國の大義を見聞する處有之候今回從軍布敎を念願致し管長の内命をも拜し候も各師團に○名を許可せらるゝのみにて制限有之未だ其の機會に接せす甚だ殘念に存居申候抑も佛敎とは佛となる道を敎へたるものにて宇宙唯一なる妙法の大眞理と一如又は一体せる妙法の大智慧ありて自己と同化せしめんとの妙法の大慈悲有之無限なる壽命を有するものを佛と命け決して印度の特產物には無之何人も自己の本体眞面目は眞佛に御座候此の眞佛は火不能燒水不能漂の德を有し生死解脫の境界に御座候此間の消息を心得候て后正義の爲に戰ひ生死を念頭に措かさる一刹那に於て眞佛の大飛躍を感知するとか出來可申候經文に生死の若は退若は出あるとなしと有之生死即涅槃に御座候良し戰死せられ候とも凡夫生死の夢醒めて眞佛常住の覺と化し無限なる壽命を得假の娑婆一轉して眞の寂光開顯し快樂極無きとに候予は今回の壯擧を祝するの餘り宗祖の聖語

生死の長夜を照す大燈明　元品の無明を切る大利劍と改めて

生死の夢を破る水雷艇　元品の敵を切る日本刀と唱へ

經に遊行無畏如獅子王　を改て

遊行無畏如日本軍と致し度心地に御座候敬具

全少佐の返簡

拜啓陳者過般第三回旅順閉塞事業の當時直接閉塞の大任に當りたる各大勇士の偉功に比し幾萬分の一にだも價値せさる生の微績に對し過重の祝詞に接し唯々汗顏に不堪候爾后益に勇猛奮戰爲國家死を願みさる覺悟に御座候敬具

五月十八日

●法號授與式法要　七月四日總本山妙滿寺に於て本宗篤信者村上貞藏氏の法號授與式法要を擧行せられたり、氏は大阪組合辨護士にして辨護士中の先輩、本宗信仰者の重立、本山信徒惣代にして今度貴首本多猊下より法號授與せられたるを以て此式を擧けたり

法要式の順序式は三寶禮、受持文、回向、方便、壽量、唱題書寫、法號、授與の辭、答禮、自訓、唱題にして先きの唱題中出席各敎師は新淨法衣に日主日篤日熙日監日右日升日孝と順次佛前に進み出て法號を謹書し終れは白井師導師に代り之を村上夫婦に授與し兩人は別席にて這の新淨法衣を直に着し佛前に進み起立合掌導師日主起立法號授與の辭あり、兼て佛前に備置きたる法號の一軸を授與し終れば村上禮子は父母兄弟に代り靜閑に答辭を述べたり禮子の答辭は淸淨の信念と溢るゝ斗りの喜とにして參列者の多くは異敎の方々滿場一致感に打たれ思はず感涙合掌唱題する者あるに至る次に自訓、唱題三歸淸淨嚴肅なる法要式は終はれり

參列者の種類を分ち重なる者を擧れば其督敎代表者權門徒代表者本宗徒側に於ては信徒總代吉川秋山富永の三氏、婦人講惣代野村たけ子富永せい子の二氏にして、淸肅なる法要式に望み一同滿足せり、方丈廣間に於て施主の茶菓の供養あり村上貞藏氏立て一同に挨拶あり當日法號授受の意趣を述べ決して法號授持は死の後に非す存生中にありこれ即ち顯本主義否活法華經主義なりと述べ終り一同午前拾一時散會せり

◎導師の法號授與の辭

南無本門壽量の本尊知見照覽、信士村上貞藏夫人村上うの夙に本宗々義を信じ宗旨の爲め盡力する事有年其の功勞に

報せんため

正法院常護日滿大居士
護法院妙常日資清大姉之法號を授與す
經王の極說に曰く每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身如來の願力絕ゆる事なく三世の化導限りなし
聖日蓮云南無妙法蓮華經と唱ふる人の煩惱業苦の三道は法身般若解脫の三德と轉じ三諦三觀者即一身に顯れ其の人所住の處は常寂光土なり　永却不失南無妙法蓮華經
明治卅七年七月四日　總本山妙滿寺貫首大僧正日主代之

◎禮子の答辭

此の度御貫首大僧正殿下宗義信仰篤き故を以て父母にいと芽出き法號賜はられ有難御請け奉る父上母上の喜びは申に及ばず我等の喜び優曇華の花咲く斗りうれしう存じ侍り此の上は我等も誓ひて永く御本尊に仕へ奉り佛祖の御恩德に御報謝勵み可申なんいさゝか父母に代りて御禮の辭まで謹みて申すになん　南無妙法蓮華經

明治三十七年七月四日　父母に代りて　村上禮子九拜

散會後城北山端某の別邸に於て出席會員に清饗を饗せられたり　（鈴木孝碩報）

廣告

古書高價買入

多少に拘わらず何書にても（佛書和漢洋共）大奮發高價に御買受申候遠隔の地方は書名冊數等御詳記の上御照會相成候得ば價格御答申上候

買入所　東京飯倉町五丁目　電話新橋二九七二　森江本店

佛教專門夏期講習會

一開設主意　本會ハ一般ノ暑中休暇ヲ利用シ教義ノ研鑽ト俱ニ軍國ニ處スル民心旨致ノ統一ヲ目的トナス

一開期及講習時間　八月七日ヨリ十六日迄十日間每日午前中三時間ツヽ

一會場　備前國和氣郡和氣町立尋常小學校內トス

一講師　大僧正小林日至師　大僧正本多日生師　科外講師數名

一學科　各宗教義批判本尊論法華大意口述安心要義成佛論軍國民依止處論

一會員及會費　〔特別會員　金貳圓〕〔正會員　金壹圓〕〔總ヲ前納〕〔贊助會員　金五拾錢〕

一申込　志望者ハ男女ヲ問ワズ氏名住所ヲ記シ七月廿五日迄ニ左記申込所ニ宛テ便宜方ヘ申込マルベシ

一申込所　備前和氣本成寺內夏期講習會事務所　大坂西高津中寺町蓮成寺神戸奧平野布教所　姫路五軒邸妙立寺　岡山津山上ノ町弘通所　山崎町本行寺

會員寄宿費等ハ總テ自辦且ツ任意自炊便法アリ

◎注意

◎寄宿料ハ〔一日分金二拾五錢〕〔已上所望ニ應ゼリ〕

和氣町ハ吉井川ノ清流ニシテ鮎魚ノ好時期釣舟打網等ノ觀覽最モ興味アリ

作州湯ノ郷溫泉ヲ特ニ設備シ會員諸氏ノ療養ニ最モ適ス

明治三十七年六月　發起

顯本法華宗　僧俗同信會和氣支部

岡山市上之町　柿屋太物店　店主　久城茂太郎

岡山市上之町（電話貳六〇番）　呉服商　柿屋本店　店主　久城茂太郎

京都市車屋町通姉小路上ル　柿屋本店京都染物部　店主　久城茂太郎

岡山市中之町（電話壹五八番）　柿屋鼈甲店　店主　宇垣卯三郎

岡山市上之町　柿屋蒲團店　店主　久城梅

岡山市上之町（電話貳五五番）　柿屋南店　店主　久城龜吉

岡山市車町通り　柿屋北店　店主　久城清吉

一統

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可　毎月一回十五日發行統一第百十三號　明治三十七年八月十五日）

第百十三號要目

○妙法蓮華經體用辨……本多日生
▲高等宗學院開院式……
○日什聖人遺文諷誦章卷上……飯本日桓
▲池上夏期講習會……
○思連記（承前）……日達上人
▲千葉縣聯合追悼法會……
○慶長宗論批判（承前）……文學士　辻善之助
▲各地教信……
○新作傾城曹賢……古定不新

御雛附ぞく

人形　小道具

武者人形　東羽子板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店

久月本店

中原福藏

（電話本局二千三百八十二番）

廣告

自今編輯事務も左記にて取扱ひ申候間原稿通信等凡て今所宛にて御送附を乞ふ

東京淺草區南松山町　統一團

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢　十二冊前金六十五錢　郵券代用は一割増但五厘切手を其とす
一誌讀申込の節は住所姓名を階書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅七年七月十五日印刷發行

發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木曉學
印刷所　北澤活版所

發行所　統一團

東京市淺草區南松山町四十五番地

（明治三十年三月廿四日第三種郵便物認可　毎月一回　全三十七年七月十五日發行統一第百十二號　十五日）

發行所東京市淺草區南松山町四十五番地